もし一輝が出会った人物がサムライ・リョーマではなく気高き碧い猛獣だったら

〇坊主

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

幼き頃に出会った偉大なる師が最後の侍でなく、碧い猛獣だったら多分こうなる。そんな妄想を書いてみた。二番煎じでしょうがご覧になられてみてくださいませ。

また最初から強い一輝君がポジティブハートでより強化されるので、原作ブレイクする可能性がある展開が嫌いな方は心してご覧ください。

目次

一刀 1
二刀 13
三刀 24
四刀 34
五刀 47
六刀 58
七刀 68
八刀 77
九刀―刃を研ぐ者達 88
十刀―《雷切》ＶＳ《剣士殺し》１ 99
十一刀―《雷切》ＶＳ《剣士殺し》２ 107
十二刀―《雷切》ＶＳ《剣士殺し》３ 118

一刀

悔しい。
それはまだ彼が幼少期であった頃に本心から思った感情だった。
１０年に一人ともいわれるほどの総魔力量が少ない彼という存在は、彼が生まれた名家・黒鉄家において存在してはいけない存在だった。
毎度高ランクの騎士を輩出する黒鉄家から劣等生が出てしまえば、当家のブランドに傷がつくのだと。そう断言はされてはいないものの、彼に対する家族や親戚の態度を考えれば５歳というまだ幼い年齢であっても察してしまうものだ。
元旦の日に家を抜け出し、裏山をたった一人で登っていく。
それは実家には彼の居場所は存在していなかったことからへの行動だった。
誰も彼に話しかけるどころか視界に入れようともしない。自分一人だけ部屋に押し込まれながら、隣ではほかの親戚らが会話と料理を楽しむ声を聴き続ける。
そんな所が嫌になって彼は行動を起こしたのだが、そこで道に迷ってしまった。
日が沈むにつれて、粉雪が吹雪に変わっていく。
周りの風景も闇へと身を投じ、彼の視界を奪っていった。
そんな中でも助けは決して来なかった。
少し考えれば黒鉄家では当然のことだったのだ。そもそも５歳になろうとしている彼は存在すらしていないのだ。最初からいない者を探す酔狂な人間などいない。
ここで凍死してしまったとしても誰も泣くことはおろか、妹以外は悲しむことすらしないだろう。
「どうして…」

そんな現実を知ってしまった彼の口から自然と言葉が溢れてくる。
嗚咽だけでなく瞳から涙を流しながら、周りの気温がいくら低下しようとも今の彼にはそんなことがどうでもよくなるほどの悔しさだった。

「どうしてみんなはぼくのことを信じてくれないんだ…」

自分の才能がないことに対しての悔しさでは決してない。
彼が一番感じているのは肉親が、家族が、自分を信じてくれていないことがなによりも悔しかったのだ。
溢れ出てくる涙をぬぐいながらも歩き続ける少年であったが、積もった雪に足を取られてその場に倒れてしまう。
凍える寒さで体力が削られ、動くことすらきつくなっていった…そんなときだ。

「どうした、少年よ。こんなところで涙を流したい気持ちはわかるが、少年にとってはここは少々危ないぞ」

緑色の全身タイツを身に纏う、オカッパな男が逆立ちをしながら彼の前に現れたのは。
普段であれば無くなった体力を振り絞って逃げ出すのが利口だったのだろう。
吹雪の中で全身タイツの男が逆立ちをしながらこちらに近付いてくるのだ。実際目の当たりにしてしまえば相当なインパクトが存在する。
でもそのときの少年は逃げなかった。その胸に秘めていた悔しさを誰でもいいから聞いてほしかったのだ。
いくら努力をしても意味がないのではないか、と。
そう涙をこぼしながら心境を打ち明ける少年に対して、彼はこう告げたのだ。

『いいか少年。――――自分を信じない奴なんかに　努力する価値はない!!』
「!!」
『己の可能性を信じられないのは、己の夢を実現できないのと同じ。己の夢を失えば、お前は今よりもずっと苦しむことになる…〝忍道〟を失うようなことがあれば生きていけない莫迦なのさ…オレもお前もな。
　それだけではない。お前はオレによく似ている…オレも昔は落ちこぼれだったんだが…今じゃ立派に伐刀者（ブレイザー）としても活躍している！だからお前も自分の道を信じて突っ走ればいい！オレが笑ってみていられるぐらいの強い男になれ!!』

　そう少年に告げた彼は、頭に積もった雪を払いながら笑顔で言い放った。
　彼からしてみればただの気まぐれで言ってくれたのかもしれない。見ず知らずの子供をあやす為にそれっぽいことを言ったのかもしれない。
　しかし少年は確かにその言葉で救われたのだ。その言葉をかけてくれたからこそ、本当に救われたのだ。
　少年の瞳に確かな熱が生まれたのを確認した彼は、再び逆立ちで離れていこうとする。

「あ…あの!!」

　それを呼び止めるのに、なんら抵抗はなかった。

「ぼくを…弟子にしてください!!」

　それが本来あるはずのない異常現象（イレギュラー）。
　黒鉄一輝と〝木の葉の気高き碧い猛獣〟マイト・ガイの出会いだったのだ。

そんな邂逅があってから幾星霜。
当時５歳だった黒鉄一輝も今や立派な高校生。
伐刀者（ブレイザー）と呼ばれる魔導騎士を育成する日本の中でも数少ない学園破軍学園の一年生だ。最も一年であっても入学したてのピチピチ新入生ではないのであるが、それでも確かに一輝は破軍学園に在籍していた。
ピチピチの新入生ではないのに、一年…まぁ隠しても意味がないので言ってしまうが、黒鉄一輝は留年していた。理由は必修科目の単位不足だ。
これは一輝が故意でさぼったわけではなく、実家である黒鉄家が卑劣な手回しをしたことで授業そのものに出れなくなってしまったことが原因ではあるが、今はそれを置いておこう。
「…時間はあと５分で回れれば５０周…。問題ない、僕ならできる。もしも失敗してしまったら次は３分の間に腕立て伏せを２００回やる。〝自分ルール〟だ」
一輝はそんな妨害も、今や持ち前になったポジティブシンキングで己の道を突き進んでいた。
時刻は公園に備え付けられた時計で判断するところによると早朝

５時すぎ。
まだ肌寒い時間帯にも関わらず、一輝は外周５キロメートルはある公園を逆立ちで駆け抜けていた。それも一周ではない。カウントするなら今は４７周目。なので残り５分で後３周。つまり全部で５０周することが目標だ。
もしこれを成し遂げられなければ、それ以上に厳しい目標をさらに短い時間で行うことを一輝は己に課していた。いわゆる〝自分ルール〟だ。
傍から見れば頭がおかしいと言われる内容であっても、一輝は迷わず己に課す。
それはこの〝自分ルール〟には二つの利点があるからだ。
・失敗したくないときに罰ゲームを設けることによって自分を限界に追い込むことで、より自分の可能性を引き出し、力を発揮することが出来る。
・例え失敗してしまったとしても、その罰ゲームで鍛えられることにより次の成功への布石にすることができる。
この二つの利点を以て、一輝はこの約１０年もの間に人生の師匠マイト・ガイの考えや戦闘能力、そしてその熱意を見事なまでに受け継いでいた。
当然ながらそれを好ましく思わないのは黒鉄家の手が伸びた教師陣営だ。
いくら罵倒しようが、明らかに教師と生徒の枠を超えた言葉を投げかけようが一輝の反応は全て揃って『応援ありがとうございます!!』とポジティブな返事だ。
仮にここで反論などしようものならそれに託(かこつ)けて停学、可能なら退学にでもしようと考えていたのにも関わらず事の本人は眩しいぐらいの笑顔で感謝してくる始末。
嫌味も一切通じず、溢れんばかりの笑顔で対応されつづけた教師側が逆に自分達との器量の違いをまざまざと見せつけられているようで、関わることが嫌になる教師もいるほどであった。

「よし……５０周！時間は…丁度か。…うーん、達成したけどぴったしか…せっかくだし後５分素振りをしてから帰るか」

そんなくそつよメンタルになった一輝は〝自分ルール〟を達成したにも関わらず、追加で鍛錬を開始することにした。それにより本来であれば早めに寮に入ったお姫様と起こるはずだったとらぶるをさり気なく回避する結果になる一輝であった。

伐刀者（ブレイザー）となる魔導騎士は国家の戦力としての側面を担っている以上、魔導騎士たる者達は戦闘能力が求められる。

それは国家間の戦闘だけでなく、テロリストらの反社会集団の脅威から市民らを護るためにも必須だった。

そんな伐刀者を目指す一輝は明らかに憤怒の表情を隠さない美女と共に競技場の舞台へと昇っていた。

「では模擬戦闘を行う。双方、己の固有霊装（デバイス）を《幻想形態》で展開しろ」

「来てくれ。《陰鉄》」

「傅（かしず）きなさい！《妃竜の罪剣（レーヴァテイン）》!!」

レフェリーを務めるのは本学園の理事長であり、今の状況を作り出した元凶である新宮寺　黒乃。

大剣型の固有武装を構えるヴァーミリオン皇国の第二皇女　ステラ・ヴァーミリオン。

相対するは破軍学園でＦランクと称された刀の武装を持つ黒鉄一輝。

世にも珍しいＡランクの魔導騎士とあって、学園自体に人が少ない今の時期であっても興味を持った生徒達がちらほらと競技場へと集まっていた。

最もほとんどの生徒は一輝が勝つとは微塵も思ってはいないのか

一部を除いて彼を見ていない。
そんな状況には慣れっこのためなのか一輝もそれに対して何も思うことがなく普段通りの姿勢だ。

――――ＬＥＴ（試）’ｓ（合）ＧＯ（開）ＡＨＥＡＤ（始）!!

「ハァァァァァァ!!」

だが試合が始まってから観客たちの表情が一変する。
開始と同時に炎纏う大剣を一輝の脳天へと振り下ろす。
力任せながらに振り下ろしたかのようにも見えるその一連の動作は一介の生徒では決して出せない鋭さを確かに放っていた。
そこから生み出された威力は第三競技場そのものが激震した結果から言わずともわかるだろう。

「――――ハァ!?嘘でしょ!?」

だがそれを黒鉄一輝は真正面から受け止めた。
大剣の一撃を刀で受け止める技量の高さは一輝の足元に大きなクレーターが出来ていたことからも現れている。

「なんてふざけた攻撃力だ。まともに食らったらひとたまりもないな」
「〜〜ッ!!防いだアンタには、言われたくないわよ!!」

それを挑発ととられたのか、ステラの攻撃は一層苛烈になっていく。
だがその猛攻の中でも両者の頭は冷静だった。
一輝はステラの斬撃をすでに見切ったためにいなすことが出来たため。
そしてステラは一輝の魔力量が極小のために、無意識に体外へ出ている微弱な魔力すらも彼の《陰鉄》は越えられない事実に。

「どうしたんだい？まだ決着はついてないよ？」
「…どうしてアンタはそこまで出来るの？アンタは他の有象無象と違って強いわ。他でもないアタシが認める。誰にも文句は言わせない。でもそのうえで言わせてもらうわ。絶対に私に勝てない。何度もアタシに攻撃を加えてる。でもそのどれもがアタシの魔力防御を越えることすらできていないのよ。これが意味することをアンタが理解できていないはずがないわ」
「それは言われた通りだよステラさん。確かに僕の《陰鉄》では君を倒すどころか傷一つすらつけられはいないだろうね」
「――だったらなんで」
「でもね。それはあくまでも常識で考えればの話だろう？」
「……は？」

ステラは一輝が言っている言葉の意味が理解できなかった。
事前に確認した黒鉄一輝という男のステータス。それは確かに総魔力量が常人よりも極めて少なく、それが原因で留年しているということ。
魔力を持つ伐刀者（ブレイザー）は魔力を持たない攻撃では決して倒せない。それは無意識に漏れ出す魔力が自動で魔力のない攻撃を無力化するからだ。
それが世間一般の常識であり、紛れもない事実である。
一輝は微量ながら確かに魔力を持っている。しかしそれは魔力を持っているだけだ。いくら外傷を与えない固有霊装（デバイス）の《幻想形態》であったとしても、この戦闘中でステラに対して傷はおろか魔力によって刀先が制服に触れることさえ許されていない。
それはステラの防御を突破できていないまぎれもない事実であり、その時点で決定打どころかダメージソースすら存在していない証明だ。それが今の状況を整理した結果だった。
それなのに目の前の男は微塵も諦めていない。
数多の挑戦者を真正面から叩き潰してきたステラだからこそわか

る眼の違い。
それに対してステラは直感的に悟る。彼は本気で自分に勝とうとしていることを。
「――そう。でもね、アタシだって負けるつもりなんて毛頭ないわよ!!」
ステラは一輝の発言を決して挑発であるとは考えなかった。
これまでステラに敗北した面々は口を揃えてこう言った。『努力をしたのに才能に勝てなかった』と。
自分がこれだけ努力をしてきたというのにも関わらず、才能にふんぞり返っている奴に負けたと。侮蔑に近しい眼でステラを見た。ステラ自身が他の誰よりも影で努力をしていた事実に気づかずにだ。
魔力に乏しい眼前の男も自分の魔力防御を突破できない現実を知った瞬間にそのような眼になるのだろうと思っていた。だが違った。彼の眼は輝いていたのだ。『こうでなくては困る』というかの如きその輝きに。
ここまでの流れを観戦していた生徒達は気づいていないだろう。それは一輝に対して冷めた空気が漂っていることから明白だった。
それに反してステラの額に冷たい汗が浮かぶ。その原因はこれまでの剣戟。
一撃で大地を震撼させるステラの一撃は、問答無用で相手を押しつぶす一撃だ。その特性上、決して押されっぱなしなどという展開は起こらない。そもそも受け止めることさえ許さないのだ。
だというのに初撃は完全に受け切られ、今もステラの剣技だけでは決定打になっていない。
それはすなわちあしらわれていることに他ならない。
《陰鉄》を見事に操り、ステラの力を込めた斬撃は受け流され、行動を制限するための行動は受け切られる。
まるでステラの行動パターンが見透かされているようだ。
いや実際に見透かされだしているのだろう。互いの剣が重なりあ

う回数が増え、それに比例してステラの足が僅かながら、しかし確実に後退させていた。

「お、おい…なんか皇女さまが押されてないか…？」

観戦していた生徒達もようやく異常に気付き、ざわめき始める。

最初は気のせいだろと認めなかった生徒も数撃、数十撃と一輝が刀を振るい、それをステラが受ける姿が多く視界に入ってからはなんとも言えない表情へと変わっていた。

いくらこちらが攻撃を繰り出そうが動きを読まれ、逆に利用される。

（だったらそれをこちらが利用する!!）

これまでのステラの行動は全て攻撃に集約されていた。

向こうもそれを前提に行動を読んでいるはずだと仮定し、その裏を掻く――！

数撃交わした後に初めて見せた『逃げる』という挙動。

一輝は彼女の剣技を見切った上で刀を振るっていたが故に大きく空振りをしてしまう。

（かかったッ!!）

そのタイミングを見逃さない。

斬り上げの空振りで発生したがら空きの脇腹をめがけて《妃竜の罪剣（レーヴァテイン）》で薙ぎ払う。

斬りあげた一輝の《陰鉄》の刃は上空に泳いでいる。確実に防御に使われるよりもステラの攻撃が当たるほうが早い。

《妃竜の罪剣（レーヴァテイン）》の刃はそのまま一輝の脇腹を深々と薙ぎ払う。そのはずだった。

「それは甘いよステラさん！」
「!??」

一輝は刀で防ぐ選択肢を取らなかった。
しかし受け切ったのではない。
刀を斬り上げた動きの流れを利用し、その場で跳躍。大剣《妃竜の罪剣（レーヴァテイン）》の腹を滑る様にして回避していたのだ。

（一体どんな反射神経してるのよコイツ!?）

ステラの視界にはすでに蹴りを繰り出そうとしている一輝の姿が映っている。
剣でガードをしようにも、大きく振り払った影響で確実に間に合わない。

「木の葉旋風!!」
「ッ～～!!?」

相手の武装を無効化しながらの回し蹴り。
横腹を狙った蹴りであったが、薙ぎ払う動作のままステラは防御ではなく、回避を選択。
だが身を捩る程度の不完全な回避では蹴りを完全に避け切ることが出来ず、回し蹴りはステラの左肩に直撃し、そのまま蹴りとばした。
「ほう…流石〝碧い猛獣〟の弟子だけあるか。よもやアイツを蹴り飛ばすとは…」

クリーンヒットとは言えない蹴り。だがその不完全な当たり方をした一輝の蹴りを喰らったステラは客席の方へと吹き飛ばされ、壁に直撃する。その衝撃を壁面は受け止めきれずに円を描くように罅が入り、傍にいた生徒達の悲鳴をあげさせた。

Ｆランクがａランクの騎士を蹴り飛ばす。そんな通常ではありえない結果を目の当たりにした生徒達は唖然とし、黒鉄一輝という青年を知っている黒乃は改めて一輝の実力に舌を巻く。

「〜〜〜ッッ!!」

「ステラさん。ステラさんの剣技はすごく研ぎ澄まされていて素晴らしいと思う。一朝一夕で身に付けられるレベルの技量ではなかった。一挙手一投足からステラさんが培ってきた努力を感じ取ったよ。

でもそのうえで言わせてもらう。僕はステラさんを越える」

壁へと直撃したステラが立ち上がるのを視認しながら追撃を行うようなことはせず、一輝はステラの実力を純粋な気持ちで称賛し、宣言した。貴方を倒すと。

完全にステラが立ち上がり構えなおしたのを確認して、一輝も左手を腰に廻し、そのまま軽く腰をおとして右の手に刀を構えた。

「そして僕は証明する。例え恵まれていなくても、己に課した圧倒的な努力が、天才を上回ることを!」

それは黒鉄一輝が初めて人前で言い放った己の〝忍道〟であった。

二刀

「…っっ！わかったわ。だったら!!」

蹴り飛ばされたステラは一輝の宣言を聞いて大剣を天に掲げると彼女の剣に宿っている炎が彼女に呼応し、その光度と温度を一気に跳ね上げ生きているかのようにその姿を滾らせる。

光の柱の如き炎は天井に触れるや否や一瞬で溶かしつくした。

これがステラ・ヴァーミリオンという強者。《紅蓮の皇女》が持つ最強の伐刀絶技（ノウブルアーツ）。

太陽が放つ光の如き煌きと、大気中の塵すらも燃え尽きる極大の極光。

まさに必殺技と言っても過言ではない超大技だ。

「最大の敬意を以て、アンタを完膚なきまで倒してあげるわ!!」

この技を出した時点で求めるのは剣技での決着ではない。

剣技、そして体技共に先ほどの蹴りで己の完敗だと認める材料になるには十分すぎた。

故に剣客としてではなく、伐刀者（ブレイザー）としての決着を求めたのだ。競技場そのものを、戦場を焼き払うことによる虐殺とも称される決着を。

「《天壌焼き焦がす竜王の焔（カルサリティオ・サラマンドラ）》――!!!」

触れるもの全てを焼き切りるように、光の剣から光が溢れる。

初撃のように受けきることは決して許さないその熱量が一輝の視界を埋め尽くし、炎がまるで津波を連想させるかのような範囲で襲い掛かってきた。

「――ありがとうございます。ステラさん」

無機物を瞬時に溶かす熱量に観客たちが慌てて逃げ出すなかで、眼前に迫る敗北を前に一輝の口から出た言葉は恐怖でも、敗北を認める宣言でもない。感謝の言葉だった。

彼女が放つ技は紛れもなく今の彼女が放つことが出来る最強の技。それを使うことを選択してくれたことへの感謝だ。

超えるチャンスを与えてくれたのだ。だからこそ、今全力で越えるべき価値がある。

「妹にもなんども言われたよ。『お兄ちゃんは魔導騎士以外ならなんでもなれるのだから、そちらを目指したほうがいい』とね。確かにそうかもしれない。でも僕は諦める気はない。だって――――自分を信じれない者には、努力する価値なんてないんだから」

すでに絶縁レベルにまで達している黒鉄家との因縁。一輝が伐刀者（ブレイザー）になるためには七星剣武祭での優勝が最低条件だ。

全国の英傑が集う祭典で、魔力をほとんど持たないFランクたる一輝が優勝するのがどれだけ険しいことなのか？それは実際に出て、戦ってみないとわからない。

だが、何よりも。一輝には周りから無謀だと言われようとも、決して歩みを止めないと決めている。それは一輝は自分の可能性を信じている何よりの証拠だからだ。

「僕が僕を貫くために、これまで培ってきた僕の全てを、今ここで示し！」

故に一輝はここで奥の手を切ることになんら躊躇いはなかった。

――――八門遁甲！

「僕の最強を以て、君の最強を打ち破る!!」

――――　第三　生門……開!!

今こそ、自分の〝忍道〟を貫き守り通す時!!

「おぉぉおおオオォォオオオオオオ!!!!」

瞬間、一輝の身体から光が生まれる。
それは焔のように溢れんばかりの輝きが。
自分と同じ火属性の能力なのか。ステラはその疑問をすぐに切って捨てた。
すぐにわかったからだ。あれは可視化できるまでに高まった『魔力の塊』であると。

(魔力が増大してる!!?)

魔力とは生まれた瞬間から総量が決まっている。生まれつきだからランク分けがされるのであり、羨望の的になりやすい。
そんな魔導騎士が台頭してきてからというもの、後天的に魔力量が上がるなど、聞いたこともない!

(でもそれは関係ない!彼の力が魔力を底上げする能力であったとしても、この熱量には敵わない!!)

ステラが技を発動するために距離をとったことで、双方の間合いは60メートル以上。
であれば、リーチが長い天壌焼き焦がす竜王の焔(カルサリティオ・サラマンドラ)が一輝をとらえるのが先だと判断。
一輝の様子が尋常ではないことは目に見えて明らかであっても、己の切り札を切っている時点で後戻りなどできはしない。だが、ステラの脳内では、この技を以てしても、一輝を倒す映像がイメージできな

かった。

「っッ!!でも!ここで勝つのはアタシよ!!」

自分の思考に恐怖を覚えながらも、己を奮起させるために高らかに声を挙げる。

例えどのような行動をしてこようとも、先に焼き尽くしてしまえばなんら問題になりはしない！

ステラはそのまま光の剣を振り下ろし――――

――――光の剣が両断された。

「……え？」

――今、何をされた？

幼いころから有り余る魔力に身を焦がしながらも、血の滲む努力の末に習得した《天壌焼き焦がす竜王の焔（カルサリティオ・サラマンドラ）》。

溢れんばかりの太陽の熱量がステラに触れようとする全てを焼き払ってきた。

放てば必ず勝利する。文字通りの必殺技。そのステラが誇る最強技が瞬きの間もなく消滅した。

目を見開きながら驚愕するあまり、ステラの思考が止まる。

それはコンマ単位での思考停止であったとしても、今の一輝に対してはあまりにも致命的。

瞬きの間もなく、手を伸ばせば届きそうな距離で、一輝はすでに攻撃動作に入っていた。

「――絶剣」

阻むものをすべて一刀両断する上段の型。
その姿を見たステラは瞬時に理解した。これは確実に食らうと。
であれば、どうにかして一矢報いねばならない。

（――綺麗――…）

だが冷静な思考を押しのけて、ステラは魅入ってしまっていた。
それは美しいものを見つけてしまったものが抱く感情――一目惚れ――だった。
そんな感情を抱いてしまうこと自体がおかしなことだ。つい先ほどまでどうやって倒すかを頭の中でシュミレートし、それを実行していたのだ。実際はその通りにはいかなかったが、攻撃を受けようとしている以上は余計なことを考えている場合ではない。
しかし、戦いには似つかない感情を抱いてしまうほどに――

「《一刀修羅》」

――彼が振り下ろした一閃がとても美しく見えたのだ。

――

「……ん……ここ、は……」

ステラが目を覚まして最初に見た光景は見慣れない天井だった。
天井に備え付けられている照明のじんわりとした明るさが、微睡(まどろ)んでいたステラの意識を浮上させる。

「目が覚めたか。ヴァーミリオン」

ステラが横たわるベットの側で煙草をふかしていたこの破軍学園の理事長　黒乃がステラの覚醒に気づいて声をかけた。
数秒何故自分がここで寝ているのかを考え、先ほどまで決闘をしていたことを思い出す。それを考えればこの場所は病室なのだろう。
そうステラは判断を下し、そんな病室で悠々と一般学生にとって害のあるものを吸うなと思いもした。が、それよりも先に出てきた言葉は自分が考えていたものと全く異なっていた。

「……なんで、アタシは生きているの…？」
「――……忘れたか？あれは殺傷能力を無くした《幻想形態》での決闘だ。故に斬られたとしても死にはせん。最も、奴の剣気を初見で、それもあそこまで間近で受ければそんな感想にもなるだろうさ。それを示すようにヴァーミリオン。お前は丸一日寝ていたのだぞ？」

ステラの言葉に若干の苦笑を浮かばせながら、黒乃が事の経緯を説明する。
それを聞いて漸く頭の整理が追いついてきた。
本来であれば殺傷能力のない《幻想形態》で斬られたとしても、外傷は一切残らずに極度の疲労が発生する。
故に再生医療機材であるＩＰＳ再生槽(カプセル)や医者を用いる必要もなく、自室で休ませてもよかったのであるが、念には念をいれて病室を用いたというわけだった。
例え外傷がなくとも、精神が死ねばそれは人としてまともな行いを

することが不可能になる。
　現に本来であれば二時間ほどで起きても良かったはずなのに、１０倍以上の時間をかけていたという結果が彼らを不安にさせていたのだろう。心なしかステラが目を覚ましたことで遠くで様子を見ていた医者が胸をなでおろしている。

「…負けたのね…アタシ。それも何一つ勝てなかった…」
「まぁ、そう悲観するなヴァーミリオン。あいつは私と打ち合えるだけでなく、ハンデ戦で実際に勝ってる男だ。現状でお前が敵う相手のレベルではないさ」
「…元世界ランキング三位《世界時計（ワールドクロック）》にも勝ってるって…なによそれ…」

　自分が戦っていた相手のバグっぷりに引きながらも、それならば納得だとステラは思った。
　たった2分で相手の動きを完全に把握する動きだけでなく、ステラの伐刀絶技（ノウブルアーツ）をも両断するその技量。それほどの猛者であれば納得だ。
　不可能とされていた自分の限界を超えた魔力量を増やす男だ。
　それを知ってると納得してしまう自分がいた。

「――理事長先生。アイツは――」

　だがそれで興味が消えるわけではない。
　本来の所持量を遥かに超える魔力を強引に生み出すあの方法が、まともな技術であるわけがない。
　ステラが至ったその考えを読み取ったのか、黒乃は言葉を挟む。

「心配する必要はない。アイツは先ほど治療を終えてすでに自室へ戻っている。外傷で言えばお前よりもずっと重症だが、命に関わるレベルではないよ」
「そうですか…ありがとうございます。理事長先生」

黒乃の言葉を聞いて少し安心した。

「……ほんとうなら、もっと聞きたいことがありました。でも、すいません。また眠くなってきたので、もう少しここに居させていただいてもいいでしょうか？」

安心したことで、少し気が緩む。

でもそれはいけない。まだ、してはいけない。

「――――わかった。好きなだけいるといい。手荷物はそこの机に置いてる。気が晴れたら、戻るがいいさ。」

黒乃はそういうと共にいた医者を連れて病室から出て行った。

ドアが閉められ、ステラ以外に誰もいなくなった病室はやけに静かに感じた。

彼女はステラの心境を理解したのだろう。

最後の言葉はそれを察した言葉だった。この病室周辺から人払いを行ったことで、今のステラは文字通りの一人ぼっちだ。

「……っっ、ぅ…ぐすっ…」

誰もいないことに安心したからなのか、先ほどの試合を反芻しながらステラの真紅（ルビー）の瞳から宝石が落ちた。

最初は気のせいかと思った。

だが、一滴、二滴、三滴と、シーツの上を転がり落ち、そのたびに白色を少しずつ暗く彩らせている。気のせいではなかった。

「うぅ…ぅぅぅう、ぁっ…」

はしたないと思いながらも己の口から出てくる嗚咽は無くならな

い。
抑えようにもそれを上回る勢いで溢れ出てくる感情をステラは抑えきれなくなっていた。
「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッッッ――――!!」
負けたことに対する絶望なんかでは断じてない。
文字通りの正々堂々とした決闘での決着だ。
ではなぜ自分はこんなに情けなく泣き叫んでいるのだろうか。
それはわかっている。
黒鉄一輝という男に、完敗したことが悔しいのだ。
天武の才に恵まれようとも、努力を怠ったことは一度たりともなかった。
自分を煽てることしかしない自国での環境ではこれ以上の成長は望めないと自らの意思で判断し、破軍学園に入学を決めた。
しかし例え伐刀者(ブレイザー)育成機関であったとしても、自分を負かすほどの実力者はそれほどいないだろうと考えていた。
驕っていたわけではない。事実、彼女を越える可能性がある生徒は破軍学園全体でも五本指で数えられるほど少数だろう。それは揺ぎ無いものだった。
しかしそんな考えと、その事実は完膚なきまでに壊された。
剣技で負け、体技でも負け。伐刀絶技(ノウブルアーツ)での勝負でさえ、完全敗北。
言い訳のしようもない惨敗だ。
敗北したことに対してステラに非があったわけではない。答えは単純だ。
黒鉄一輝が鍛え上げてきた努力が、ステラ・ヴァーミリオンが培ってきた努力を遥かに上回っていただけの話なのだ。

誰もいないのをいいことに、どれだけ泣き叫んだことだろうか。
あまりの悔しさに涙が溢れ続け、そしてそれをせき止めようと壁になった掛け布団は絞れば水が出てくるのではないかと思ってしまうほどに湿っていた。声も荒げて叫んでいたためか、心なしか喉も痛い。
だがこれまでため込んでいた感情を一気に吐き出したことで、大分落ち着くことが出来ていたステラはこれ以上居続けるのは流石に迷惑になるだろうと判断する。
布団を剥げば、外傷がないので当然と言えば当然であるが、自分が着ていた制服が目に映った。おかげで着替える時間を省くことができた。
で、あれば後は泣いた後の自分の顔をどうにかしなくてはならないと向かった洗面台で、ステラは改めて自分を見つめる。

「……ふふっ、ひどい顔してるわね、アタシ」

自分の想像よりもひどい顔つきであったがその表情は暗いという表現は不適切だ。むしろ口から出た言葉とは真逆で清々しく、負けたというのに誇らしい表情に思えた。
先ほどまで泣くほどに悔しかったというのに、来日してたった数日で本国に居た自分よりも眼に光が宿っていることが少しだけ可笑しかったのだ。

「イッキ。――クロガネ　イッキ。」

自分を負かした青年の名を呟く。
思いもよらない出会いと、そして敗北であった。
だがそれがどうした？日本という未知の世界に入りこんだのだ。自分の予期しない出来事などこれから数多に受けることだろう。むしろこんなに早く、全力で挑める相手を見つけることが出来たことは幸運だと思うべきだ。

机に置かれてたリボンを手に取り、手慣れた手つきで髪を結んだ後に3回ほど水で顔を洗う。
濡れた顔を拭き切った後に鏡に映った自分の姿を見て、異常がないことを確認したステラはそのまま病室を後にする。

「絶対に追いついてやるんだから」

外に出ると心地良い風がステラを歓迎する。
これからの学園生活は良いモノになりそうだ――。

三刀

黒鉄一輝の朝は早い。
朝五時には必ず起床し、鍛錬の準備を行う。
軽めの朝食を摂取した後で、広大な敷地を有する破軍学園の少し西。朝は絶対と言っていいほど人が居ない公園で一輝は普段通りの鍛錬を行うのだ。
それは規則正しい生活をしているというのもあるが、なによりも己が行う鍛錬が自己分析しても他人から見て不審者でしかないからだ。
まず己の四肢に重りをつける。尚、一輝は常にこの重りを装着して日々を過ごしているのだが、これに関しては普通だろう。日常生活でも実際に行う人は多くいるはずだ。
だが、その肝心の重さが世間一般の比ではなかった。

「〜〜〜ッッッぐぉぉぉぉぉ、おぁぁほぉぁぁぁあ、あ、あ、!!」
「ちょっ!?ス、ステラ!?女性が発しちゃ駄目な声と表情になってるよ!?」

ステラから、放送ＮＧレベルの声が発せられている。
表情とて、今の彼女を見た誰もが一国のお姫様だとは想像もつかないだろう。良くてもお笑い芸人だと思われるほどの顔芸だ。
両手両足に付けた重りが明らかな原因だった。
腕は何とか上げられはするがプルプルと震え、足に至っては拘束されているのではないかと思ってしまうほど動いていない。
心配する一輝を他所に、ステラはそんな重りをつけても楽々と動いている一輝を見て、対抗心を沸き立てる。

（――負けて、られないんだからァッ!!!）

羞恥心をかなぐり捨ててステラが重りと格闘しているのも理由が

あった。と言っても彼女自身の我が儘を通した結果がこれなのだが。
ルームメイトとして同じ部屋で共に暮らすことを承認したステラは次の日から一輝の日課である鍛錬に同行するようになる。
そこで着替える一輝の鍛え上げられた肉体に見惚れていたのだが、一輝の手足に付けられたウォーマーに気づいたのがきっかけだった。
話を聞けば単純で、中に重りが入っているという。
ステラ自身も戦闘態勢になれば魔力を全身に回して身体能力を向上させて戦うので、一輝が持つ重りも悠々と持ち上げられていただろう。だが、これをあえて魔力を使用せずに、日常生活の一部として慣らすという考えに自分も一緒にやると宣言。早く追いつきたい一心で一輝の制止を振り切り、一輝の重りを手に取ったのだが。

『――!!??ふぉぁぁあぁあいだぁぁあぁあぁあぁぁぁい!??!』

あまりの重さに持てず、そのまま左手が地面に直下で落ちていく。
地面に叩き落とされただけでなく、プラスして重さをダイレクトに喰らったことでその日人生で初めてと言ってもいい悲鳴をあげた。
その日も緊急で医者にかかることになったのだが、理由が理由のために呆れられたのは記憶に新しい。
ちなみに一日目はそれで鍛錬時間が終了した。
二日目は何とかつけられはしたものの、一切動けなかった。
そして三日目になるのだが、自力で持ち上げるにまで至ったことに一輝は素直に感心する。
変な声を発していることは彼女の尊厳にも関わることなので静かに記憶から忘却し、ステラが半分の重さとは言えど耐えられている事実のみを受け入れたのだ。
魔力を使用しないで動けているのは十年に一度と言われるほどの魔力の才能を持ちながらも、頼り切ることはせずに己を鍛え続けているなによりの証拠だった。

（やはりすごいなステラは…）

ステラが軋むロボットのように一歩、また一歩と動き始めるなかで、一輝は逆立ちで公園の外周を３０周ほど駆け抜けていた。その尋常ではない速度で外周を駆け抜けていく様はまさに変態である。
全力疾走に緩急をつけて心肺機能に意図的に高負荷をかけるのはもちろんのこと、今のように逆立ちでシャトルランのように急加速急停止を繰り返す。
それが終われば木々に括り付けていたロープつき丸太をブランコの如く勢いをつけて複数動かし、目隠しのまま全て迎撃する。
それが終われば通常の素振りと片足立ちからの独り稽古。
その後に通常の筋力トレーニングを加えて２時間で全てを終わらせる。
そんな暮らしを一輝は毎日続けていたのだ。
一輝が目標数を終わらせて公園のベンチに戻ってくれば、ステラも目標として引いていた白線まで進み切っており、全身から汗を噴き立たせていた。

「はァッ――！はァッー…っ!!やって…やったわぁあ!!」
「お疲れ様。ステラ」

たった数十メートルであったとしても、目標を達成できたステラは声を張り上げる。
滝のように流れる汗を拭く余裕すらないほど疲れ切っているというのに大した根性だ。
渡した飲料を一気飲みするステラから目を外して遠くにある学園を見る。
一輝の視界には木々に隠れてしまっているおかげか学園の上部しか確認できないが、下部では始業式を彩る装飾が飾り付けられていることだろう。

（これからが、僕にとって本当の勝負だな）

少し乱れた呼吸を整えながら一輝は思う。
去年の一年間は学ぶチャンスすら受けられないまま生徒として過ごした。
最も一輝はそれで出来た時間でより己を強化していったので、むしろ貴重な時間を得れたのではないかと前向きに考えているのでこれと言った感情はないが、今年は違う。
新宮寺　黒乃が現在の理事長に就任したことで学園の方針が一新された。
ステータスに関係なく、意欲ある者だけが参加する七星剣武祭への『選抜戦』。
ここで勝ち抜くことが出来なければ、一輝の求める道は未来永劫訪れない。
ルームメイトであるステラだけではない。
学園最強と呼ばれる生徒会長や、それに近しい実力を持った友人も一輝が参加すると知れば意気揚々と挑みに来ることだろう。

「――なんだか楽しそうね。イッキ」
「そう見える？まぁ事実なんだけどね。戦いたい相手もいるし」
「イッキが戦いたいって言うレベルの生徒が他にもいるのね。……ひょっとして女の人じゃないでしょうね？」
（なんか殺気を感じるんだけど…）
「いや女の子じゃないよ」

苦笑しながら一輝は答える。
その答えに満足したのか殺気をなくしたステラは帰りましょうと言うと先に進み始め、その姿を見て内心安堵した。
一輝は嘘はついていない。
確かに戦いたい友人は男だ。伐刀絶技（ノウブルアーツ）勝負になれば流石にステラに分があるが、それ以外ではむしろ彼が有利に近いだろう。
一輝自身も彼の実力に舌を巻いたほどの彼が今日までの間、何もせ

ずに学園生活を謳歌するはずがない。
その彼の成長を楽しみにしているのだ。
なら何を安堵しているのかと言われれば実はもう一人、一輝が会いたい人がいるのだ。そしてその人物は女性であった。
と言っても恋人なんていう甘い関係ではなく、師匠同士の交流によって生まれた程度の出会いであり、今から2年の付き合いである。
剣士としての実力も相応の持ち主。彼女の伐刀絶技（ノウブルアーツ）も初見で対処は難しいだろう。
そんな彼女の話題を一輝の口から出すようなヘマはしない。
一輝は鈍い所はあるが、鈍感ではない。
男としての尊厳を有しているし、雄としての直感もある。故に彼女のことは語らなかった。口に出してしまったら明らかに不機嫌になることを直感で察した一輝の見事なファインプレーと言えるだろう。
しかし、一輝は気づけなかった。
ステラ・ヴァーミリオンは一輝に対してすでに尊敬にも近しい感情を持っており、なんだかんだで独占欲が強い。故に彼女の話を聞いている聞いていないに関らず、実際に出会ってしまえば多少なりの嫉妬の炎を吐き出してしまう歳相応の少女であったということに。

その後、始業式を無事に終えた一輝たちは配属された教室で担任折木（おれき）　有里（ゆうり）――通称ユリちゃん――から軽いレクチャーを受け、

その後に行われる『七星剣武祭代表選抜戦』に関する説明を受けた。
細かい説明を省けば、内容はこうだ。

――最後まで勝ち抜け。

それが伐刀者（ブレイザー）を目指す生徒にとって、《七星剣王》という頂点を目指すための最低ライン。
毎年全国ネットで七星剣武祭が放送されていることでわかるように、この大会に出場できること自体すごいことだ。全国に顔を売るという意味でも七星剣武祭以上の催しはないだろう。
顔が売れるということは伐刀者（ブレイザー）を保有する各国や軍への引き抜きもありうる話であり、それに伴う金銭のやり取りは普通ではお目にかかれないレベルになるだろう。
だが生徒全員が《七星剣王》を目指しているのかと言われれば否であり、本気でなろうとする生徒のほうが少数であるのが現状だ。
考えてみれば当然の話だ。
伐刀者（ブレイザー）になること自体命のリスクが存在する。
《七星剣王》になるのが伐刀者（ブレイザー）になる条件ではないため、自分からリスクを冒さなくとも多少の成績を残してさえいれば国直轄の魔導騎士になることは可能なのだ。
故に折木先生も最初に強制ではないことを告げていた。
人生とは人それぞれであり、どのような道を進んでいくのかは自分が決めるべきだと。だがそのうえで彼女自身は生徒達に率先して参加をしてほしい、自分の可能性に挑んでほしいとエールを送っていたことで入学したばかりで浮ついていた生徒達も彼女を教師であると認めたことだろう。

「おブファ――ッッ!!」
「「ゆ、ユリちゃぁぁぁぁぁぁん!?!?!」」

最後の〆で見事なまでの吐血をしなければ、であるが。

結局初日のホームルームはお開きとなり、何事もないまま一日を終えるのであった。

話題のAランク《紅蓮の皇女》とFランクの黒鉄一輝の試合動画が拡散されていたことで、ちやほやされる一輝を妬んだ生徒たちを互いに無傷で一蹴するなどのハプニングもあったが始業式から5日が経ち、新入生の初めての休日が訪れていた。

皇族として箱入り娘でもあったステラは日本の庶民的文化に大変興味を示し、それにより休日は普段の鍛錬を終えた後に映画を見に行く約束を一輝に取り付けた。

一輝自身も男である。

抜群のプロポーションを誇り、そのうえでブンブンと尻尾を振る姿が幻視できそうなくらいの笑顔で映画を見る約束を提案されれば即座に了承するのが男としての義務であると理解していた。

破軍学園の近くには全国展開をしている大型のショッピングモールが存在する。

一輝達の目的である映画上映会場は最上階である4階に存在するのだが、すぐに向かうようなことはしない。

映画を観ようにも上演時間の都合上、空白の時間帯が存在する。であればその時間を用いてステラの好奇心を満たしながらフードコートで時間を潰すほうが効率的というものだ。

「…っとと、もうこんな時間か。そろそろ映画館（シネマランド）に行こうか？」

「えっ、もうそんな時間なのね。イッキとの会話が嬉しくて話し込んじゃった」

（……それは僕もだよ）

事前に調べていた評判だと噂のクレープ屋でステラの満面の笑みを頂いた後、他愛もない話をしていると程よい時間になっていた。
ステラの本心を内心で喜びながら二人は目的地へと向かう。その際に顔が赤くなっていることに気づいた一輝はステラに気づかれない様に少し歩調を早めて顔を見られない様にしたのは内緒だ。

「そういえばどんな映画があるのかしら?アタシ映画を見るのが初めてだから楽しみ!」
「僕もなんだかんだで映画を見る機会は少なかったからなぁ」

自分の生徒手帳でシネマランドのＨＰへアクセスし、上映している映画を確認する。
『私は妹に恋をした。※Ｒ―１５』
『男達の失楽園　※Ｒ―１８』
『ガンジー　怒りの解脱』ｅｔｃ…

映画を調べているのに、最初に出てきたタイトルが上記である。猛烈にツッコミを入れたくなった。

「なんかタイトルですごく気になるものがあるんだけど…」
「なんかすんごいカオスね、これ…。なによ『許すことは強さの証と言ったな。あれは嘘だ』って」
「…これは最後の候補にしようか」
「…そうね」

ガンジーであろう筋肉ムキムキマッチョマンが重火器を構えている広告を見て意見が一致した。
興味はある。しかし混ざりすぎである。これはひどい。

「でもなんでＲ―１５は兎も角、昼の時間にＲ―１８の映画を公開してるのよ…」

「さ、さぁ？それは流石にわからないよ。でも結構恋愛ものが多そうだね」
「そうね。最初のガンジーも気になるけど…あっ、ねぇイツキ。これとかいいんじゃない？」
「ん？どれかな……」

一輝はこの時、どんな顔をすればいいのかわからなかった。
ステラが興味を示した映画はアクション物。
内容は教師として細々と暮らしていた男が強盗の場面に出くわしてしまう。通報されるのを恐れ、口封じにかかった強盗団を撃退するところから始まり、強盗団に指示を送っていたマフィアに目をつけられたことで命を狙われる。主人公は平穏な人生のために、マフィアを撃退しに向かう――――そんな内容だ。
何も変なことはない。
一輝が反応したのは中身ではなく、主演をはる俳優が原因であった。

（……師匠。俳優業をされてたんですね）

見間違えでは断じてない。
むしろ彼を見間違えるほうが難しいと言っても過言ではないだろう。
一輝が幼いころに出会い、そして稽古を日々つけてくれた人生の師匠。全身緑タイツのオカッパ頭という、傍から見れば変態的な外見。
一輝が一人立ちするまでの間、一輝の身柄を保護して見守っていてくれた恩人が、一輝の記憶通りの衣装で見事なまでにセンターを飾っていた。
タイトルの名前は――――『燃えろ！青春!!〝四〟』
ナンバリングから察するに、結構な人気を誇るシリーズらしい。

ステラも興味を惹かれていたため、一輝も見ることにした。

見事なアクションと内容の面白さに魅入ってしまい、後日シリーズをレンタルで借りて休日を潰すことになることは今の二人が知る由もない。

四刀

一輝とステラが何事もなく映画鑑賞デートを終了させた次の日。
破軍学園では『七星剣武祭出場枠』をかけた『選抜戦』が開始されていた。
一輝とステラの視線の先には初戦を飾る一年生の生徒と三年生の生徒が対峙している。
どちらも初戦ということもあるからなのか、緊張した面持ちでそれぞれの得物を構えて…否、緊張した表情をしているのは三年生であり、対する一年生は自然体の姿勢だ。
観客である生徒達が歓声を挙げている中で、一輝とステラも観戦席で二人を分析していた。

「ふふっ。すごい歓声ね」
「そうだねステラ。…これが『選抜戦』。すごい空気だな…まるで全方位から衝撃を受けているみたいだ」
「そっか、イッキも見るのは初めてなんだっけ？確か…あっ。ご、ごめんなさいイッキ。嫌なこと思い出させちゃったわね」
「気にしなくていいよステラ。去年は確かに先生たちが僕を会場にすら入れてくれなかったけど、そのおかげで今年はステラとこの空気を共感できるんだ。昔のことよりも僕は、ステラの隣に居れる。その事実が嬉しいよ」
「っ!?…ばっ、ばかいってるんじゃないわよ！そ、そそそんなこと言われたって…アタシだって嬉しいわよ…」

一輝の過去に触れてしまったステラは済まなさそうにするが、一輝はそれに対して気にしないでと声をかけた。
女性を悲しませるようなことは極力させてはいけないと、強く師匠から叩き込まれているからだ。
過去は過去である。

それが一輝が持つ黒鉄家に対する持論だ。すでに黒鉄家に対してなんら特別な感情も持っていない。

そうなのであるが、第三者であるステラはそうともいかない。堂々と口にするのは恥ずかしいのではっきりと一輝に告げれてはいないが、彼女も立派な青春を生きる少女である。

今と未来のために真っ直ぐ進んでいく青年とその生き様に惚れている彼女は、何よりも一輝を傷つけるようなことをしたくはなかった。

尚そんな不安も一輝の本心によってすぐに払拭されて、鼓動が周りに聞こえているのではないかと思うぐらいに胸の高鳴りをさせているのだが。

『おぉーっとぉ!!一瞬で相手の動きを封じ込めたぞぉー!!初戦から波乱の幕開けだ!!三年生を新入生が降したァ!!勝者は一年！有栖院凪選手ーーー!!』

競技場であるというのに甘い雰囲気を作り出していた一輝達を置いて試合は進んでいたようだ。

司会の声がスピーカーを通じて拡散され、観客たちもそれに伴って声を挙げた。

視線を移せば三年生の生徒が一年生に背後を取られて首筋に短剣を突き立てられている姿が映った。

選抜戦では霊装も生身を用いることが前提条件だ。斬れば物理ダメージを疲労という形に変換する《幻想形態》ではない。

それを意味することは実戦を前提とした競い合いであり、明言されてもいないが相手を死亡させても問題はない。それはリングに上がる前に同意が必要なことから察しが付く。

これが本当の場であれば負けた三年生徒はすでに死んでいただろう。

そう思うほどに、一輝から見たあの一年生は暗く沈んでいるように見えた。

選抜戦期間中は授業が午前中のみとなり、午後からは夕方まで選抜戦が行われる。
選抜戦が開催された翌日の１４時が一輝の試合時間であり、上記のことを考えれば早い出番の方だ。
そのため昼食をしっかりと済ませた一輝は多少の腹ごなしのために早めに競技場近くへ向かい、空いてる敷地でステラと軽い打ち合いをしていた。

「ありがとうステラ。付き合ってもらって」
「いいのよ。イッキはこのアタシが認めたルームメイトなんだから。これぐらいのことならいつだって手伝うわよ」

出場する人間は１０分前までには控室で待機していなければならない。が、まだ二十分ほど余裕があった。
観客席で他の生徒達の試合を観てから控室へと向かっても悪くないだろう。
だがその選択肢は取らない。その理由は一輝の対戦相手だった。
《狩人》桐原（きりはら）　静矢（しずや）
去年の七星剣武祭代表の一人。
それが一輝が戦う初戦の相手だ。
事前に準備運動をして身体を馴らしているのも、それだけ彼――桐原――という生徒を警戒しているということだ。

「《狩人》ね…。相性は確かに悪いけど、イッキが負ける姿が想像できないわね。最もそんな姿見たくないんだけど」
「ははは。そう言われるのは嬉しいな。だけど僕からすれば初めての公式戦だ。なにが起こってもおかしくない」

5分ほど動けば腹ごなしも丁度いい頃合いだろう。
ステラとの打ち合いをやめて会場に入る準備を始める。
そして会場に入ってすぐに、一輝はステラと別れて控室入りするのだった。

『さぁついに第四試合へと入りました！そしてすごい人入りです！やはりというか、それだけこの試合に対して期待度が高いのか!!司会は引き続きこの私、放送部の月夜見が。解説は西京（さいきょう）　寧音（ねね）先生が担当します!!』
『よろしく～』

そしてついに一輝の出番がやってくる。
事前のステラとの試合が出回ってしまっているせいなのか客席は満員であり、それでも噂を見定めようと立ち見する生徒も目に映る。
そんな光景がこれから起こる試合への期待なのだと高らかに声を挙げたのは司会を務める人物だ。彼女も例の動画を見ているがため、ワクワクとした内心を隠しきれずに実況の熱として表されていた。
『ではでは選手の紹介と行きましょう！昨年一年生にして七星剣武祭出場という快挙を成し遂げました！それだけでなく、優勝候補と言われていた文曲学園の三年生をワンサイドゲームで完封した紛れもな

い実力者！決して無理はせずに、必ず勝てる相手から確実に勝つ！その徹底したスタンスから付いた名は《狩人》です！ここまで公式戦・交流戦共に〝無傷〟で通しており、当然ながら今回の選抜戦においても代表への最有力候補です！二年・桐原　静矢選手ッッ!!』

実況に合わせて桐原が手を挙げると、観客席から黄色い歓声が上がる。

一見すれば爽やかな青年であり、人当たりのよい対応だが、彼の戦闘方法は完全迷彩（フルステルス）。

姿を隠し、相手を徹底的に弄る戦い方を好むリアリストだ。

『そんな《狩人》に相対するはなんとFランク騎士！ですが侮る事なかれ！ただのFランクではないことは皆さんご存知の通りでしょう！なんと彼はあの《紅蓮の皇女》であるAランク騎士　ステラ・ヴァーミリオン選手相手に模擬戦で勝利を収めているのです！果たしてあの映像で見せた実力は本物なのか偽物なのか！謎めいていた力が今ここに示されます！一年・黒鉄　一輝選手ッッ!!』

一輝は解説が終えた後に観客席へと軽く一礼を行う。

（――――すごい人だ）

公式戦は初めての一輝はこれほどの観客に見られて戦うのは初めてだ。

動きは問題ないであろうが、心の方はそうはいかない。

試合前までの落ち着いた自分は一体なんだったのか？そう思ってしまうほどに一輝は内心落ち着かない。

（そうか。これも緊張か……）

一輝は師匠から言われたことを反芻する。

それで多少落ち着いたものの、この気持ちの原因に一輝は納得した。
当然だ。初めてなのだ。ここまで見られるのは。
昨日まで、一輝は見られることすらされなかったのだから。
始めての修行を行ったときのように。真剣で初めて斬りあいを行ったときのように。
一輝は初めて自分の試合を大勢に見られるという経験をしたのだ。
一度でも負ければ選抜から落とされる事実にらしくもない緊張をしている。
一部を除いて理解されず、応援もされず、逆に理不尽な仕打ちを受けても続けてきた一輝の努力。
それがこの一戦で、たった数分…いや下手をすれば数秒で決着するかもしれないこの戦いで、その全てが水泡に帰すかもしれない。
これまで生きてきた一輝の人生全てが、無駄だったと突き付けられる可能性もある。
そんな戦いを前にして、緊張しないはずがない。
そんな自分を見て、笑う。
緊張？焦燥？それがどうした？
すべてが無に帰すかもしれない？戦場に立つ以上はその覚悟はしておかねばならない。
この初戦は人生の岐路に立つ障害の一つなのだ。
だからこそ、越えがいがある。

「出てきたかい。この場に立つ、ということは相応の覚悟があってきたと捉えても構わないんだろう？」
「あぁ。去年はどうすることもできなかったけど、今年は違うよ。僕は、君を越えていく。来てくれ《陰鉄》」
「…ほざいてろ。狩りの時間だ《朧月》」

見下す表情で一輝へ問いかけた桐原であったが、一輝の勝利発言を聞いてすぐに機嫌を悪くした。

去年までなんら成績も出せず、授業に出ることさえ許されていない一輝の発言はプライドが高い桐原の神経をさぞ逆撫でしたことだろう。

『それでは双方の準備が整いましたので始めさせていただきましょう！本日第四試合、開始です!!』

「木の葉旋風!!」

試合開始と同時の速攻。

一輝が対桐原静矢の戦法としてまず最初に考えた案だ。

完全なステルスに移行されてしまえば、遠距離攻撃を今のところ持たず、接近戦主体の一輝では倒すことが困難になってしまう。であればそうなる前に倒してしまえばいい。

開始と同時に魔力を脚力強化に回し、ブースターとして使用。

離れていた距離を一気に詰めて、練磨してきた脚技を放つ。

放たれた蹴りは吸い込まれるように桐原の顔へと向かっていき――

「甘いんだよねぇ!!」

「ッ!?」

――身を地に伏せることで躱された。

追撃の踵落としを放つがそれも避けられ、桐原の身体が完全に見えなくなった。

「なぁ黒鉄、避けられたことに驚いてるな？完璧な踏み込みだった。動きのキレも悪くない。それなのに何故避けられたのかってなぁ？」

いつ撃たれてもいいように構える一輝を囲むように木々が生えてきていた。

桐原の姿を探すが――――いない。

（…確実な案が防がれたか）

一輝は己の失敗を悟った。

「考えてみろ黒鉄。ボクの伐刀絶技（ノウブルアーツ）である《狩人の森（エリア・インビジブル）》は強力だ。自分の姿を透明にするだけでなく、木々を生やすことで更地からボクの戦い易いフィールドにすることだって可能だ。遠くから一方的に攻撃する相手をどうするか？そんなもの決まってる。今キミがやったように、撃たせる前に撃つ。簡単な答えだろう？だけどね、そんなことをこのボクが思いつかないとでも思っていたのかい!?」

「ッ!!」

背後から飛んできた矢を叩き落とす。

すぐに身を翻して背を狙っていた矢を斬り落とす。

そのまま前転で頭を狙ってきた矢から逃れる。

利き腕を狙って撃たれた矢を回転して躱す。

『おぉっとぉ！黒鉄選手！姿が見えない桐原選手が放つ矢を落とす避ける斬り払う!!接近戦を主体とする黒鉄選手ですが桐原選手の攻撃を巧く凌いでいます!!』

『おっと。どうやらくろ坊はそれだけでは済まさないようだ。見な』

一輝の身のこなし方を称賛する進行の月夜見だが、西京はしっかり見るように促した。

言葉通り、一輝は只々為すすべなく逃げているのではない。

姿が見えなかろうと、武器が弓である以上は飛んできた方向に射撃手はいる。

（矢が飛んできた方向から射撃手の位置を大まかにだが割り出せる。

それが君の《狩人の森(エリア・インビシブル)》の弱点だ！）

注意深く矢が現れた瞬間を見極めれば位置を探り当てることは可能だ。

矢の勢いと角度から相手の方角を逆算し、瞬時に頭へと答えを叩き出して行動に移る。

それを相手の処理能力を上回るまで続ければ、いつかは桐原(答え)に辿り着く！

「セヤァ!!」

「…ッ」

そうして振り払った《陰鉄》の先に、確かな感触を得た。

切り離されたことでステルスの力から解放された、桐原静矢の制服の切れ端だった。

『制服の切れ端!?く、黒鉄選手は桐原選手の居場所をとらえたのでしょうか!?』

『きりやんの《狩人の森(エリア・インビシブル)》は矢まで透明にはならない。くろ坊は矢が飛んできた位置から、居場所を逆算してるのさ』

「やれやれ、これは参った」

解説の西京がしゃべっている間に戦いは小休止した様子だ。

数撃攻撃を振るった一輝は相手の出方を窺って構えを解かない。

そんな一輝を見て桐原は全く思ってもいない言葉を紡ぐ。

「確かに先ほど奇襲を仕掛けられるのは慣れているとは言ったけど、まさかボクが放った矢から位置を逆算してくるなんて思わなかったよ。大した集中力だ。それが心眼ってやつなのかい？」

「大したものじゃないさ」

「フフッ。ボクの《狩人の森(エリア・インビシブル)》の攻略法が分かって安心しているのか

い？全く、ボクの居場所がわかる様になっただけで勝った気でいるなんてほんとに…不愉快だよ」

桐原の声に殺気が籠もる。

再び矢を構えたのだろうと予測して、知覚の網を張るために集中力を研ぎ澄ます。

「不愉快だと思うのなら、今番えている矢を放てばいい。僕はその悉くを打ち払おう」

「フッ…随分と気合の入った表情だ。ボクが矢を撃った瞬間に君の伐刀絶技（ノウブルアーツ）を発動して距離を詰めて斬ろうって魂胆だろう？…だが悲しいかな。伐刀者（ブレイザー）の世界は《能力》こそ全てだ。そんな小手先の技が通用するのは無能力者のクズ共だけだ」

「それはやってみなくちゃわからないよ」

「わかるのさ、当然だろう。ところで黒鉄、そんな呑気に構えていいのかい？ボクはすでに攻撃したよ？」

瞬間、一輝の右太ももに風穴が空き、血が噴き出した。

「――ッッぐ、あぁああ!?」

予期せぬダメージに苦鳴を漏らす一輝は状況を理解するのに数秒を要した。

自分の脚を見れば、明らかに血が出ている。幻覚ではない。

それはつまり、警戒していたのにも関わらず、攻撃を受けたということだ。

一輝の眼に見えないほど早く矢を撃ったのではない。

桐原の性質上、一輝が見えないほどに高速で矢を放つことはしないはずだ。

であれば、この現状は一輝にとって最も合ってほしくない予想だった。

「はははは!!どうだ見えたかい？ボクの攻撃が！見えなかっただろう？君の動体視力でもだ。今年のボクは放った矢すらもステルスにできる。つまり当たるまで攻撃されたことに気づけないのさ!!故に君はボクには勝てない！絶対にねぇ!!」

姿も、そして攻撃も。一切見えず、知覚できない現状に勝利を確信する桐原　静矢に対し、一輝はなんら反論をすることさえできなかった。

それからの十分間は誰がどう見ても試合ではなかった。

弱者を一方的に強者が嬲る。まさに《狩人》の名に恥じない『狩猟』。それは進行役の月夜見でさえ、この現状に言葉が詰まるほど。

攻撃の瞬間すら見えない現状で、全身を血に染めた一輝は刀を杖替わりにして辛うじて立っている状況。完全に攻め手を失った一輝が責められ続けているというのにも関わらず、一輝はまだ致命傷の傷を受けていない。

あまりにも一方的であるから情けをかけた？

答えは否。桐原静矢はそんな優しい存在ではない。楽しんでいるのだ。自分は安全圏に居座り、獲物を弱らせて狩猟するその行為を。

この会場で一輝の惨状を見ている生徒が全員察してしまうほどに、桐原は試合を終わらせる一撃を撃たない。

彼は聞きたいのだ。一輝本人の口から、『参りました』という言葉が出てくるのを。

故に《狩人》は手を抜かない。

獲物を得るために手段を問わない。その姿勢こそが、《狩人》たる彼の根源なのだ。

「ッッ！イッキ……っ！」

一方的に嬲られる一輝を見てステラは拳を握り締めて叫ぶのを堪える。
試合開始前に言っていた一輝の言葉。それが現実になってしまった。
接近戦において、破軍学園でもトップクラスの実力者だろう一輝でも、ここまで状況が悪化してしまえば手も足も出なくなる。勝敗は決していない。である以上一輝は諦めるようなことはしないだろう。だが現実は相手が終わらせようと思えばいつでも終わらせられる状況だ。

（どうして…どうして使わないの!?）

ステラとの試合で使用し、そして自分の最強を打ち破ったあの技を使わない一輝を見て困惑する。
試合開始時に発動する暇はなかっただろうが、さっきのは違う。嬲られ始める前に発動すれば回避することぐらい難なく可能なはずだ。でもそうしないのは一体…。

「――苦戦しているようだね。黒鉄君は」

手を組んで祈ってしまいたい。そんなステラの左耳に凛とした声が届いた。
声のした方へ顔を向けると大和撫子を彷彿とさせる黒髪の女生徒がステラへと視線を向けていた。
隣、お邪魔するよとステラに一言伝えると、ステラが座る椅子の隣の階段に腰を下した。

「ケッ、あの野郎…あんなモヤシ野郎に負けやがったら承知しねぇぞ…」

その女生徒の後ろでドカッっと音を立てるように階段に座るのは制服を大きくはだけさせた長身の男。
明らかに普通の生徒ではないことは、制服の上から着た臙脂(えんじ)色の上着と胸元に刻まれた笑う髑髏の入れ墨が物語っていた。
俗世に疎いステラでもわかる。この男は不良に位置する人物だと。
その不良認定された男は目の前の光景に対して明確な不満を抱いていた。

「あんななまっちょろい攻撃最初にしやがって…あんな攻撃反撃してくださいって言ってるモンだろうが」
「確かにあの場面で回し蹴りは甘かったのかもしれないけど、それでも実際に初撃から反撃に転じれるのは君ぐらいだと思うよ蔵人。黒鉄君だって言ってたでしょ？公式戦に一度も出たことないって。それなら緊張してしまっても仕方ないと思うんだけど」
「あ、アンタたちは一体…」

一輝の苦戦を見て苛立つ男とそれを宥める女性。
片や非行に走っているであろう生徒と、片や清楚の表現が相応しいほどに綺麗な女生徒。
一輝が苦しんでいるというのにも関わらず、一輝の知り合いととれる発言をする彼女らをステラは見過ごすことはできなかった。

「あ、ごめん。ボクとしたことが挨拶を忘れちゃった。ステラ・ヴァーミリオンさん初めまして。ボクは綾辻(あやつじ)　絢瀬(あやせ)、そして後ろに居るのは倉敷(くらしき)　蔵人(くらうど)。どちらもこの学園の三年生だよ」

五刀

大和撫子の言葉が似合う綾辻　絢瀬
不良の言葉が相応しい倉敷　蔵人
そんな対照的な二人が一輝の苦戦を見て仲良く苦言を呈している。
嘲笑するような言葉ではなく、一輝の行動にアドバイスを加えているかの言動にステラは言葉が詰まった。少なくとも彼女らは、自分よりも黒鉄一輝という男を知っているとわかったからだ。
何故八門遁甲を使わないのか。
ステラが先ほど抱いていた疑問。
それに関してもあの状況なら使えないなと言い合っていることから、すぐに気づいた。そして察した。

（…アタシってイッキのこと、全くと言っていいほど知らないんじゃないの…？）

考えたことすらなかった事実にステラは愕然とする。
ステラが破軍学園への入学手続きを済ませ、その後一輝との決闘を行なった後、多少の言葉を交わしあった。
その際に一輝の口から自身に対する明確な好意を告げてから、ステラも一輝を異性として意識するようになっているのは確かだ。
惚れた異性に対して幸せになってほしい、力になりたいといった感情を持つのは至極真っ当であり、ステラもその枠から外れることはない。故に一輝の隣へ並び立てるように一層奮起して猛特訓しているのだ。
それにヨーロッパの小国であれども、ヴァーミリオンという一国の皇族は世界的にも有名だ。
である以上第二皇女であるステラ・ヴァーミリオンという名も広まっている。あまりテレビを見ない一輝も知っていたほどだ。ある程度はステラのことを知っているだろう。

だが黒鉄一輝はどうだ？

ステラが知りうる情報は名門黒鉄家出身であるにも関わらず、劣等生の汚名をつけられてしまったFランクであるということ。そしてそれを覆すためにステラ以上の努力と研鑽を重ねたことで、ステラすらも打倒できるほどの猛者へと成長しているということだけ。

一輝があまり話したがらないということもあるが、ステラは一輝がなぜ黒鉄家という名家から迫害を受けているのかすら知らなかった。破軍学園に入ってくる前のことであれば猶更わからない。

自分が一輝のことを知らないだけではない。同棲を始めてから、彼の口からステラに己のことを何も告げてもらえていないのだ。

「――――ッッ……？」

ズキッと内臓が刺されたかのような痛みが走った気がした。

身体の不調かとも思ったが痛みは一瞬で終わり、通常通りの感覚になる。

ステラは自分で感じた違和感に疑問を持った。だが思い当たる節がない。一体今のはなんなのだろうか。そんな疑問を掻き消すように周りの観客たちによる喚声が大きくなった。

そこでステラは考えをやめた。

これ以上は無意味だと、そう判断したからだ。

『く、黒鉄選手、桐原選手の攻撃を幾度と躱し、反撃の手まで打つほど健闘しておりましたが、『見えない矢』には全く反応できずに一方的な展開になってしまいました。しかし…黒鉄選手は未だ降参する気配

を見せすらしません…っ！彼になにか秘策があるのでしょうか…っ!!』

実況の声を聞いて一輝は苦笑する。

（無いことはない、…だけどなぁ…）

確かに秘訣はある。

それはステラとの闘いでも用いた技術　八門遁甲。

そして一輝の伐刀絶技（ノウブルアーツ）である《一刀修羅》。

この二つ、そのどちらかでも用いればこの状況を好転する可能性があるだろう。だがそれはあくまでも推測にすぎなかった。故にこの鬼札（ジョーカー）を切る判断に至れない。

《一刀修羅》は兎も角、八門遁甲を今の一輝が使うにはリスクが高すぎた。

全身を改めてみれば右太ももには風穴が空き、今でも血が溢れ出ている。

両腕に風穴が空くのは何とか死守しているが少なくない傷があり、胴にも相応の傷を負っていた。

この状態で八門遁甲を使ってしまえば、ただでさえ溢れ出ている血液が溢れ出して失血死の道を歩む可能性があった。

かといって己の総魔力を一分に凝縮する《一刀修羅》も似たようなもの。

一分間で見つけれさえすれば確実に勝てるだろうが、見えずそして気配もない相手だ。見つけれなければ自動的に一輝の敗北が確定する捨て身技を放つにも、桐原静矢がそこにいるという確信がなければそう打てない。

だからこそ一輝はまず自身を攻撃する見えない矢をどうにかしようとしていた。

しかしそれを嘲笑うかのように桐原は大声をあげる。

「ククク、フフハハハハ!!みっともない!なんて汚らわしい!なんて真剣な表情なんだ!それでは駄目だよ黒鉄君。笑顔さ!笑顔で頑張ろう!頑張るだけの理由が君にはあるはずだ!そうだろう?この試合は君の卒業がかかっているんだから!!」

『えっ……』

桐原の思いもよらない言葉に観客が息をのむ。

それは事前に進路には影響はないと聞いていた生徒達が主な反応源であった。

その反応にあぁ、すまないと一言添えた桐原は続けて全員に向けて言葉を言い放った。

「安心してくれみんな。卒業がかかっているのは彼だけさ!ここにいるFランクの騎士様である黒鉄一輝君は能力が低すぎて普通だと卒業できそうにない。だから新理事長は条件を出したらしいんだよ。『七星剣武祭で優勝し、そして七星剣王になれば卒業させてやる』ってね!!」

『『『　…ぷ、あははっはっはははっはは!!　』』』

その言葉にほとんどの観客が吹き出した。

嘲笑が訓練場を支配する。

もう試合を観ていた先ほどの真剣な空気が無くなり、悪意ある笑いが一輝へと向けられていた。

《七星剣王》は日本全てに置ける学生騎士の頂点。

その歴代はほとんどBランク騎士が名を馳せており、稀に出場するAランクが剣王になる以外には至極稀にCランクが剣王の名を勝ち取っている。が、それ以下がなった話は一切聞かない。

破軍学園にいる生徒達も大半がD～Eランクの騎士たちであり、Cランク相手に一矢報いることすらできないのが現状だ。そんな中で10年に一度の劣等生と言われるFランクが優勝するなど、常識的に考えれば笑い話にしかならない。

常に生まれながら恵まれたステータスを持つものを羨み、常に見上げ続けるのが彼らだ。そんな中で数少ない見下せる『Fランク』が大それた目標へと進むことすら烏滸がましい。自分たちが諦めているのだからお前も諦めろと、存外に言っているのだ。

「おやおや散々な言われようだね黒鉄君。だけど仕方ないさ。分不相応な夢をみるから反感を買うのさ。『身体強化』なんてみみっちい能力で頑張ったところで僕の《狩人の森（エリア・インビシブル）》には敵わない。これが現実なのさ。わかるかい？生まれ持った格が違うんだよ黒鉄君!!どれだけ粋がったところで見苦しいだけなんだよ!!」

『そうだ！見苦しいんだよお前は!!』

『桐原君の言う通りよ！』

『引っ込め七光り野郎!!』

『さっさと諦めろよ落ちこぼれ野郎!!』

桐原の煽りに乗る様にして観衆は呼応して、一輝へ声の重圧をぶつけにかかる。

現状を見れば結果は明らかだ。

一輝は満身創痍であるにも関わらず、対する桐原は制服の裾が切れただけで明確なダメージを負っていない。

音も、気配も、匂いも、そして姿すらも消し去る《狩人の森（エリア・インビシブル）》に対して一輝が反撃の手段を持っていないのは観客たちの眼からすれば明らかだった。

誹謗中傷の雨あられ。

一輝の心が折れるまで、それは続く。

「な…なによ…それ……」

ステラは桐原から放たれた言葉に衝撃を受けた。

七星剣王に成れなければ卒業できない？なんだそれは？彼を卒業させる気が学園にはないのかと。

ただでさえ学園側の圧力で授業に出れず、一輝は留年しているのだ。それだというのにさらに七星剣王に成らないと卒業できない？ふざけるな！卒業させないの間違いではないのか！

そんなステラの感情を察してか、黙って周りの嘲笑を聞いていた絢瀬が口を開いた。

「ステラさんは知らなかったんだね。でも桐原君が言ったことは紛れもない事実だ。ボクや蔵人も黒鉄君自身の口から聞いたからね」

「ふざけてるの⁉七星剣武祭って言ったらアタシの国でも聞くぐらいの名よ！そこの頂点に立つことが卒業条件だなんておかしいにもほどがあるわ!!」

「それはなぜだい？」

「な、なぜって……」

絢瀬の冷静な声がステラに冷や水をかけた時の様な錯覚をさせた。なぜ絢瀬がここまで冷静なのかがステラには理解できない。自分は今すぐに腹の中で暴れまわる熱を周りへぶつけたい気持ちがあるというのに、彼女は大海の如き双眼でステラを見つめていた。

「黒鉄君の忍道は『己に課した圧倒的な努力が、天才を上回ることを証明する』こと。ならば手っ取り早い方法は一つだけだ。《七星剣王》になればいい。それが何よりも黒鉄君の夢であるし、新宮寺理事長にとっての目標でもあるんだ。つまりこの条件は双方の利であっても障害にはなっていないんだよ？それなのになぜキミはふざけていると言い切るんだい？」

「っぁ…」

絢瀬が告げる言葉にステラは今日何度と食らった衝撃を受けた。いや今までで一番のショックだったのだろう。ステラは眼を見開いて言葉を失った。まるでバケツの水をかぶったかのように寒気を覚えた。

それは先ほどまでのステラの考えが何よりも、一輝を否定するものだったからだ。

「キミが黒鉄君に好意を抱いているのはさっきの様子からわかる。周りに怒りを感じてくれているのが何よりの証拠だろう。でも、だからこそ。余計な世話になるかもだけど、ボクは言わせてもらうよステラさん。今考えていたことをこれからも彼に抱くのであれば、キミは彼から離れるべきだ。そうでなければ黒鉄君にとっても、ステラさんにとっても重石にしかならない。夢を否定する付き人ほど、不要な存在はないよ」

「…ッち、がう。違う!!アタシは、アタシは…っ!!」

両手で頭を抱えて否定する。

さっきまで怒りを覚えていたとはいえ、なぜ七星剣王は不可能などと暗に言ってしまったのかがわからない。

だが一輝の努力そのものを否定するようなことを口に出して言ってしまったことは紛れもない事実。

自分で言ったことを信じ切れず、感情が真紅(ルビー)の瞳から涙が溢れ出てくる。

一体どうしてしまったのか。

試合前には一輝が苦戦する姿なんて想像もできないなどと言っていたというのに、今は彼がこれ以上傷つく姿を見たくない。

嘲笑う観客に囲まれた一輝は今でも諦めず、狙撃を警戒して構えている。それならば一輝を応援している自分は彼の名を口に出して応援するべきだ。それなのに、簡単なはずのそれが出来ないのだ。

彼の実力を直に受けたステラは一輝が負けると考えているわけではない。だがそれ以上傷ついていく道を応援することが躊躇われてしまう。

試合に勝ってほしいのに、これ以上戦ってほしくない。

そんな矛盾した思考が頭の中を塗りつぶす。

なんだこれは。自分は一体どうしたらいいのだ。

「――――やっぱり、というか当然というか、だね」

項垂れるステラに絢瀬は納得したようにうなずいた。

彼女を刺激しない様にゆっくりと。絢瀬はステラの頭を撫でていく。

長年刀を振るってきたであろう絢瀬の掌は固い。だがそれを想わせないほどに優しく感じた。

「ステラさん。キミは黒鉄君が大好きなんだね」

「――――ッッ！」

その言葉にステラは顔を涙で腫らしながらも絢瀬の方を向く。

視線の先には微笑みながらステラをしっかり見据えた絢瀬がいた。その表情はまるで妹を宥める姉のように、しかし嫌な気分にはならなかった。

「キミは黒鉄君が傷つくのを見るのが嫌なんだろう？だけど黒鉄君が進んでいく道のりは険しい。だから傷つかないなんてことはない。キミはそんな苦難の道を諦めずに進んでいく彼に尊敬の念を抱いているんだろう。でもそれだけじゃない。彼のためにそこまで怒り、そして悲しむことが出来るステラさんは、ほかの誰よりも黒鉄君のことを思っているよ」

「で、でも…アタシは…イッキに対して、ひどいことを…」

「ふふっ。確かにさっきボクはキミを責めるようなことを言ったけどね。でもひどいことなんて思っていないよ。むしろ嬉しく思う」

「えっ…」

「黒鉄君はさ、家族から迫害を受けていたらしいんだ。そんな家が嫌になって抜け出して、そこでマイト・ガイっていう恩人と出会って彼に保護されたんだ」

「そ、そう…なの？」

「うん。本人から直接聞いたからね。で、その恩師のおかげで今の黒鉄君がいるんだけど…正直な話、彼はね。抱え込みすぎているんだ。なにもかもね。ボクの問題もそうだったけど、蔵人の想いも彼は受け止めて、一手に引き受けたんだ」
「…フンッ」

絢瀬が苦笑しながらそう言うと、後ろで黙って聞いていた蔵人はつまらなさそうに鼻を鳴らした。だがなぜかすこし恥ずかしそうにしているようにも見えた。

「でも黒鉄君は自分が抱えている悩みは決して話してくれなかったよ。吹っ切れてるとは言っていたけど、迫害なんていう簡単に切れるはずのない問題が起こす自分の悩みを誰にも話さなかった。自分の恩人にもさ。ボクだって彼に救われた恩もあったよ?でもね、ほかの誰でもない黒鉄君がそれを望んでいなかったんだ。ボクが力になるって言ったとき、なんて言ったと思う?『応援ありがとうございます。でも心配いりません』の一辺倒さ。……あぁ、なんだか無性にイラついてきた」
「ちょ、ちょっと…大丈夫なの?」
「ほっとけ。絢瀬の持病みたいなモンだ」
「うるさいよ蔵人。で、そんな周りを気にせずに進んでいた彼と久々に連絡を取ったとき、なんていったと思う?」
「えっ…そ、そうね…『お久しぶりです』とか?」

蔵人の言い分に対して抗議を挙げながらも話を続ける。
そこで聞かれた問いに対してステラは常套句を答えにあげたが、その解答に絢瀬はそうじゃないと笑ってこう言った。
「『僕に好きな人ができた』だよ。ふふっ、愛されてるねステラさん」
「…――――ー～～～っっ?!?!」

電話越しでも一輝の喜びの感情を感じ取れるぐらいだったと語る絢瀬の言葉に、先ほどまで暗く沈んでいたステラの感情が一気に浮上する。
確実に今の自分の顔は人に見せられない状態になってしまっているだろう。先ほどと真逆の理由で俯いてしまった。
今の彼女は熟れたリンゴにも負けないぐらいに真っ赤になっているだろう。

「ボクも彼と出会って2年だけど、あんなに喜ぶ声を聞いたのは初めてだったよ。その時に理解したんだ。彼にも心を開ける大切な人が出来たんだ、…てね。だからボクはステラさん、キミと黒鉄君の関係を喜ばしく思う。キミは黒鉄君を支えられる唯一の人物になれる。ボク達では無理だった。だから彼の友達として、ステラさんにお願いするよ。彼を、黒鉄君を宜しくお願いします」

座りながらも深々と頭を下げる絢瀬にステラはすぐに返答をできなかった。
一輝から想われていたことは嬉しいが、そこまでだとは思わなかった。そして一輝に対してそこまでできる友人がいたことにステラは感動を覚えていたのだ。
自分の胸に手を当てる。
自分よりも遥か高みを目指し、日々猛進する黒鉄　一輝という青年に追いつくのは簡単な話ではない。
だが彼に負けた時、自分は彼に追いつくと誓った。
その言葉を修正する。

（アタシは、イッキを越える！）

追いつく。それだけではだめだ。足りない。ならばどうするのか？
簡単だ。彼を追い越して、追い越されて、互いに競い合って自分と

いう存在をイッキの心に刻み付ける。
それが出来て初めて彼の隣に並び立てたと声高に叫ぼう。
隣に立って彼を支えていくことこそが、彼を支えれる唯一の存在だとまで言ってくれた絢瀬に報いる方法だ。

「…ありがとうアヤセ先輩。アタシ、決めた。この想いをイッキにぶつけるわ」
「そっか。なら黒鉄君は、もう安心だね」

ステラの瞳に光が宿る。
それを感じ取った絢瀬は心底から安心したような表情を浮かべた。
彼の周りには障害が多い。
だけどそれを跳ね返す力を持っている。
そこからさらに支えてくる存在を見つけた。

（ステラさん。ボクの初恋の人を、幸せにしてください）

――――もう安心だ。

「イッキーーーー!!!」

嘲笑の嵐を吹き飛ばす勢いで彼の名を叫ぶ彼女を見て、絢瀬自身も自分に刺さっていた棘が確かに抜けた感じがした。

六刀

桐原が仕掛けた精神攻撃。
膝が折れるほどではなくとも、確実に一輝へと言葉の刃は届いていた。
心無い言葉を受け、自分の努力を笑われていることに対して確かな怒りを抱いていることを一輝は自覚していた。
怒りは冷静さを失わせる。
歯噛みする思いが判断を遅らせ、避けれるはずの攻撃も僅かながら食らっていた。

「イッキーーーーーー!!!」
『『　!?　』』
「っ!?ステラ!?」

そんな津波のような罵声が突如として裂かれる。
悪い意味で一体化しかけていた空気が一蹴され、会場にいた皆が叫びの方向へと振り向いた。
その驚きようは試合を行っていた二人も声の主へ意識を向けてしまうほどだ。

「イッキ!何をもたもたしてるのよ!アンタはアタシを倒した!それはほかの誰が笑おうが、紛れもない事実じゃない!!『例え恵まれていなくても、己に課した圧倒的な努力が、天才を上回ることを証明する』。それがイッキが決めた想いなんでしょう!?天才、才能、そんな人間の一部でしかない小さなものにしがみつかずに自分の可能性を信じ続けたイッキが、こんなところで負けるはずないじゃない!」

出会ってから伝えたことのなかったステラの本心を、皆がいる会場で解き放つ。
この場で言うのは恥ずかしい?知ったもんか!ここで言わずして、

いつ伝えろというのか。
ステラの叫びが一輝の心に響く。
先ほどまで抱いていた怒りは何処へやら。一輝はこの瞬間、戦っていることを忘れてステラの言葉に耳を傾けていた。

「イッキがどれだけ辛くても、アタシはイッキの傍で支え続ける!!イッキが苦しいと叫ぶなら、アタシはイッキを励まし続ける!!イッキが諦めないというのなら!アタシは他の誰よりもイッキのことを信じ続ける!!!アタシが憧れた…アタシが好きになったのは、アタシの全てを尽くしたいと想ったのはっ!!いつでも前を向いて、自分自身に誇りを持つ黒鉄一輝という騎士なんだから!アタシの前ではずっと格好いいアンタのままでいなさいよ!!」

一輝がどれだけ強く、前向きであっても。心が鋼で出来ているわけではない。
罵声を浴びれば傷つくし、態度に出さないが理不尽を受ければ心は痛む。
ならば自分が彼を支える柱になる。
一輝と一緒に歩んでいくために、一輝が目指す場所に、自分も共に行きたいから――
ステラはありったけの想いを込めて叫んだ。

「だからイッキッ!!――――勝って!!!」

自分の想いが届くと信じて――――

「……絶対に勝つ!!!」

――そして、届いた。

「《一刀修羅》ァァァ!!」

身体の肉から、血中から、細胞から、一つ一つに有する魔力をかき集めて一瞬の中に燃やし尽くす。

噴き上がる蒼い焔が一輝の身体から溢れ出る。

黒鉄一輝が持つたった一つの伐刀絶技(ノウブルアーツ)。

その光はこれから一分で、桐原　静矢を倒すという一輝の覚悟が表れた証であった。

『おおっっとォ!黒鉄選手このまま敗北するしかないと思われていたが大きく仕掛けた!!――で、ですがどういうことでしょう!?黒鉄選手の魔力が明らかに上がっています!ステラ・ヴァーミリオン皇女との戦闘で見せたものとは別ものの様です!?い、一体これは…』

『…ついに切ったか。これはクロ坊が持つ伐刀絶技(ノウブルアーツ)、《一刀修羅》さ。通常で用いれるすべての魔力を体内の全組織から引っ張り出して、たった一分に凝縮して用いる一発限りの超大技。この技の後、クロ坊が持つ魔力は尽き果てるだろうね。――だが逆を言えば、クロ坊はその一分で決着をつけるつもりだよ』

桐原一辺倒の流れが急変したことで、実況のトーンが跳ね上がる。

ステラとの闘いではほんの一瞬だけ用いたが、本格的に使うのはこの試合が始めてだ。

そのため情報が少ない《一刀修羅》を解説役の西京(さいきょう)寧音(ねね)が補足したのだが、その内容に司会進行の月夜見は言葉に詰まった。

たった一分。

その一分で一輝が桐原を倒すのだと理解した瞬間に、月夜見は言葉を張り上げる。

彼女も《狩人》による狩りの凄惨さに辟易していたのだ。

明確な言葉にはしないが、内心で応援する熱を実況へと載せて、大

衆へと言葉を投げた。

「…キミの魔力が上がることはボクだって承知さ。だけどなんだい？一分？たった一分だって？クク、ハハハハハハ!!おいおいおいおい。笑わせないでくれよ？ボクの《狩人の森(エリア・インビジブル)》が、魔力をたった一分間あげるだけのそんな技に負けるわけがないだろう？出来もしないのに格好いいところを見せたいんだろうけど、らしくもないことをするんじゃないぜ？落ちこぼれさん」

そうだ、その通りだ。

確かに《一刀修羅》では桐原の《狩人の森(エリア・インビジブル)》は破れない。そんなことはわかっている。

一輝が行いたいことはもう一つのほうだ。

「〜〜———ツツツ!!はぁぁああああっっ!!」

《一刀修羅》で生み出された魔力を、霊装能力である〝身体能力の倍化〟に全て回す。

通常では2〜3倍程度で収まるだろうが、伐刀絶技(ノウブルアーツ)により、その効果を数十倍にまで高める。これならば、使える！

「———行くよ桐原君。これが、今の僕が放てる…最強の技だ！」

———八門遁甲

「第六　景門…解!!」

『…おいおい、マジかよ!?あいつ、すでにそこまで!?』

八門遁甲とは魔力を使って強引に体内のリミッターを外すことで身体の潜在能力を引き出す奥義。

《一刀修羅》で強固にした身体を、そこからさらに倍加する！

さらなる一輝の変化に驚愕する一同を他所に、一輝はすぐに行動を開始する。
大けがを負ったこの状態では、一秒すらも惜しいのだ。
霊装《陰鉄》を口に咥え、森の外へと瞬時に飛び出る。
そこは戦闘範囲ギリギリの位置であったが、今の一輝にはちょうどいい。後ろを見ている暇はない。
中継をしているカメラからでは突然一輝の姿が消えたようにしか見えなかっただろう。それほどまでの速さ。
動揺する生徒たちの中に、一輝が桐原を詰みにかかったことを理解できたのはどれほどか。

拳を空へと放つ。
貫かれた太ももから血が滝の如く出てくるが、そんなことは気にしない。

――放つ。
――放つ。放つ。
――放つ。放つ。放つ。

大気を叩く正拳の嵐。そのあまりの速さに腕が見えない。
次第に拳を振るうたびにドッ、ドッ、ドッ、と大砲を放っているかのような音が響く。
その音に生徒達が気づいてすぐ、森の端から膨大な衝撃と共に焔の津波が現われた。

「朝孔雀!!」

放つ拳が空気との摩擦で炎を宿し、空気を叩く衝撃波と炎で相手を破壊するその光景は、まるで孔雀羽のよう。
《狩人》が誇る狩猟場は瞬く間に飲み込まれ、十秒とかからずに焦土と化す。

一輝が拳を振るうのをやめればそこは試合前と同じ更地があった。

「……は？」

自分の狩場が瞬きの間もなく消滅した。
その現実に桐原の脳が追いつかない。
その姿はまさに呆気にとられたと表現するのが相応しかった。
それは迷彩が一瞬ぶれたことに気づいてすぐに攻撃へと移った一輝に気づかなかったほどに。

「これで終わりだ――――桐原君」

先ほどの攻撃で戦闘不能にならなかったのは奇跡といっていいだろう。だが、それが幸運とは限らない。
腹部に痛みを感じ、意識を戻せば己はすでに宙の上。
そして背後から聞こえてきた声の主は、がっちりと桐原の体を両腕で固定した一輝の姿。

「――、ま、待ってくれよ黒鉄君！やめようよ！もうやめよう!!こ、こんな高さから落とすなんて正気か!?大変なことになるだろ!?普通じゃないってこんなの!?どうかしてるって!!?だからやめよう！そ、そうだ。ジャンケンで決めよう！それがいいよ！ボク達は友達じゃないか!?」

すでに桐原は頭から地面めがけて落下している。
その結果が生み出す答えに桐原は恐怖し、一輝に対して話し合おうと語り掛けるが聞き耳なんて持たない。
試合開始前に死ぬ覚悟を問うてきたのは誰だったか。
生身の刀を相手に向ける時点で、一輝は斬る覚悟と斬られる覚悟は済ませている。
だからこそ、戦場で相手に容赦はしない。

桐原の足掻きを完全に封じたままきりもみ回転を加え、脳天を地面へ叩き落とす！

「――表蓮華エッッ!!!」

「ヒ、ヒィィィィィィィ！や、ヤメロォォオオオオ!!わかった！ぼくの負け、僕の負けでいい!!だからやめてくれぇぇぇぇぇ死ぬのはいやだぁぁぁぁぁぁぁ!!!」

彗星が落ちた。

そう表現したいほどの衝撃が大気を叩いて観客たちの髪を揺らす。

一輝が叩き落とした場所は土埃が舞い、リング全体に亀裂が走る。

会場そのものに攻撃してきたのではないかと思ってしまうほどの衝撃。土埃が静まり、観客の眼が釘付けになる。

煙が晴れたそこには地面ギリギリで衝突を免れた桐原の姿と、両足で今の衝撃を受け切った一輝の姿がそこにはあった。

桐原はすでに意識がなく、恐怖の表情のまま泡を吹いて倒れてはいるが、先ほど一輝が蹴り上げたところ以外に目立った外傷はない。

（――僕もまだ、修行が足りないな……）

『桐原　静矢、戦闘不能！勝者、黒鉄　一輝!!』

レフェリーの宣言を聞き入れながら、一輝の意識もそのまま沈んでいった。

――

「…で、くーちゃんどうするんだい。これからクロ坊は」
「どうするもこうするもない。アイツはアイツが信じる道を進んでいくだけだ」
「そうじゃねーよ、わかってんだろ。アレはやばいってこと」

全身から血を噴き出して倒れこんだ一輝をＩＰＳ再生槽へとぶち込んだ後、先ほど解説をしていた西京　寧音は理事長である新宮寺黒乃へと問いかける。
黒乃も寧音が言いたいことを理解しているのか、咥えていたタバコを右手でもって煙をそのまま空へとあげた。

「はっきり言わんでもわかってるさ。奴に学園の卒業条件を叩きつけたのも今のが理由だ。そして黒鉄のやつが戦闘をする際は常に戦闘態勢でいるのもそれが理由。私は理事長という立場でいるのは《七星剣武祭》の優勝と、それによる学園の腑抜けた空気をとっぱらうためだ。で、ある以上は私から言及することは何もない」
「おいくーちゃん。うちとくーちゃんの仲だ。多少のことは許すけどな、それは教師として最低な判断だぞ」
「それはあくまでも教師としたらの話だ。人としてなら話は違う。〝碧い猛獣〟自らが託した技である以上、私個人の意見で使用禁止など烏滸がましい」
「…――死ぬぞ。クロ坊は」
「死なんさ」

寧音の言葉を黒乃は真正面から切り伏せる。
考えの間もなく、言い放った黒乃に寧音は驚いた様子を見せる。

「黒鉄一輝。確かに少し前までならその可能性もあっただろう。六門

まで開いた時点でな。だけど今は違う。お前は知らんだろうが、もうアイツは一人ではない。自滅なんて馬鹿な真似はしないさ」
「……あの皇女サマ…か。っかー!!そこまで信頼してるなんて、流石くーちゃんのお気に入り。うちも妬いちゃうわー」
「べ、別にお気に入りというわけではない。それにお前は妬くなんて歳じゃないだろうが」
「つぐぉうッ！」

茶化してくるライバルに対して投げた言葉は思いのほか突き刺さったようだ。
あどけない少女のような相貌から、幼い印象を受ける彼女も黒乃の同年代。立派な大人なのだからと指摘すれば、頬を膨らませて睨んでくる。

「…くーちゃんそれ言っちゃうぅ?流石に戦争だよ?」
「ぬかせ。言いたいことがそれだけならさっさと次の解説役をやってこい。私とて暇じゃないんだ」
「ちぇーっ。まいっか。うちもクロ坊がどんな結果を生むのか気になるところだし、何よりも妹弟子がさっきの試合を観てからというもの血気だってるからねぇ。からかいにいってやるかー」
「仕事しろ」

絡んでくる奴を適当にあしらうと仕方がないといった風に部屋を後にする。
騒がしい存在が完全にいなくなったのを確認して黒乃は溜息をついた。
「――禁術　八門遁甲の陣…か。確かにこれ以上にないほど黒鉄に見合ったものだが…全く、先生も厄介なものを授けたものだ」

今回の一件を気に、七星の頂にふさわしい力を持つ者達は全員気づ

いただろう。
そして記憶したはずだ。黒鉄一輝という名の騎士の存在を。そしてその異常性を。
これから《落第騎士》と称された青年は、ただの《落第騎士》には決して戻ることはないだろう。
それだけ彼が用いた技術は大きな影響を与えるもの。
なぜならそれは世界で秘匿される才能の限界を打ち破った者、通称魔人（デスペラート）。
その領域へ素人が足を踏み入れる可能性があるほどの、危険なものであるからだ。
これから世界は彼から目を離さないだろう。
だがそんな苦境を越えて一輝が信ずる忍道を成すことを、タバコを灰皿でつぶしながら黒乃は思うのだった。

七刀

「……ここは、保健室……？」
「っ!!一輝！気づいたのね!?よかった…」
「ステ……――？」

気怠さを残しながらも目覚めた一輝を待っていたのは自分の顔を包み込むとても柔らかい感触だった。
安心する柔らかさと鼻腔へと届く良い香りが一輝の脳内を溶かしていく。全ての事象を置き去りにしてでもそれを感じていたいと思う、男としての性（さが）を強制的に付与するもの。
この世界の真理とも言えそうなこの感触。これを言葉にすれば、なんというのだろうか……――――バブみを感じる。その言葉が近いか？
もっとこの心地よさを感じていたい。うまく回らない頭でそう思いながら離すまいと一輝も両腕を回して抱きしめた。
可愛らしい声が一輝の頭上で聞こえるが、今の一輝にとって大事なことではない。

「…ここに住みたい」
「ひゃい!?」

脳が溶かされてしまったせいなのか、思ったことがそのまま言葉として口から出てしまった。だがそれは重要なことではないだろう。
顔に触れる柔らかい感触が一体何なのか。一輝はあまりの心地よさに二度寝をしてしまいそうになるが、動きたがらない頭を回転させて考える。自分は一体何をしていたのかを。
《狩人》との試合を終わらせた後、八門遁甲の副作用によって全身出血をしながら一輝はその場で倒れた。なんとか意識を試合終了まで残していたから、審判が黒鉄一輝という名を勝者として挙げていたのを聞き取ることが出来た。だから初戦敗退といったことはないだろ

う。その後はおそらく理事長が一輝をＩＰＳ再生槽へとすぐさまぶち込み、素早く処置したというところか。
それによって疲労は残っているものの、傷は完治。本日目覚め、付きっきりで見守っていたステラが当然ながら一番最初に気づいた。
そして現在に至る、と……――――――!?!?!?!?

「す、スススススステラぁぁぁぁ!?」
「きゃあぁぁぁぁ!?ど、どうしたの!?何かあったのイッキ!?」

自分が一体何をしていたのかを理解したと同時に理性が雪崩の如く押し入り、あらゆる感情を吹き飛ばした。
柔らかく感じていたのはステラが誇る双丘だ。自分が目覚めたことで喜びのあまりに抱き着いてきたのだろう。そこまではいい。男女の関係であっても自然だろう。
だがその後自分は何をした？何を言った!?

「す、すみませんでしたァァァァ!!」

ここに住みたいとはなんだ!?完全なセクハラ発言ではないか!!
確かに住みたくなるほどの心地よさだったがってそこは重要で大事だが今はそこではない!!一国の皇女様に対してなんてことを言ってしまったのだ!?
己の失態を瞬時に理解してしまった一輝は掛布団を吹き飛ばしてステラへ向かって土下座を敢行する。
姫を抱きしめて胸に顔をうずめた後のセクハラ発言など、即首をはねられる案件である。それは何とか避けねばならない。

「い、イッキ？」
「あらあら。黒鉄君もしっかりとした男性だね」

慌てながら謝罪する姿に困惑するステラとそれを見て一安心する

絢瀬。
絢瀬の表情も普段の凛々しい表情ではなく、子供を微笑ましく見守る母親のような表情をしていた。
「〜〜!?あ、綾辻(あやつじ)さん!??ち、違わないけど待ってください!これは!!」
「大丈夫。黒鉄君がステラさんのことが大好きなことは前に聞いたからわかってるよ。ボクは黒鉄君が同性愛者だったんじゃないかって心配していたんだけど、それも違ったようで安心したしね」
「えっ、僕ってそんな疑惑持たれてたんですか?」
「うん。だって黒鉄君はそんな反応をボクには全くしなかったんだもの。明確な言葉にしてなかったボクも悪いのは自覚しているんだけどね。ボクも君に好意を持って接していたんだよ?」
「……えっ」

綾瀬の言葉に本日2度目の驚愕をする一輝。
彼女が嘘をつくとは考えられないので、紛れもなく事実なのだろう。だがそうであるのなら、一輝は自分を慕ってくれている女性を悲しませたことになるのだ。
その現実を知って青ざめる一輝の顔を見て、体調が悪化したのではないかと涙目になるステラ。その二人を微笑ましく見つめる絢瀬はしばらくその空間を楽しんでいた。

そんな出来事もあったものの、なんやかんやあってステラが試合中に一輝に対して考えてしまったものに関する謝罪を一輝に涙ながらに伝え、一輝はそれを受諾。はっきりと互いが相手に抱いている想いを告げたことでいい感じの空気になっていた。
いたのだが…

「ちっと見ねぇ間に鈍ったかテメェ…？」

そんなものは俺には関係ないとでも言う様に二人の間に言葉が割って入ってくる。

二人が意識を向ければ相変わらずの髑髏を模した服を身に付けてこちらを睨んでいた。

倉敷（くらしき）　蔵人（くらうど）

破軍学園に所属する3年生でCランクに位置する魔導騎士であり、この学園でもトップクラスに位置する実力者だ。回想は省略するが、過去に一輝と対立した上で敗北を喫したことで破軍学園と同じ伐刀者（ブレイザー）育成機関である貪狼学園の推薦を蹴って綾辻絢瀬と同じ学園へと足を運んだ経歴を持つ。

あれから2年と少し経っているが絢瀬とは良い関係を築いているようで、綾辻一刀流の道場に通っていることは絢瀬からの連絡で知った。彼は一輝にリベンジすべく『最後の侍（ラストサムライ）』と呼ばれていた非抜刀者最強格で絢瀬の父　綾辻海斗の元で修行を積んでいたらしい。

破軍学園に入る前から交流を持った数少ない悪友とも呼べる男だ。

一輝自身己の鍛錬不足を痛感していたが、追撃を加える言葉が投げかけられる。

良い感じの空間になっていたのにも関わらずそれを引き裂かれたことで、風船を彷彿とさせるほどに頬を膨らましたステラが土足で踏み入ってきた男を睨んだのだが、そんな視線を意にも介さずに一輝の元へと進んでいく。

「っっ～～～～ッッ!!??!!」

「ちょ、ちょっと落ち着こうステラさん。もう蔵人！少しくらい空気を読んであげなよ！」

そんな姿でも可愛らしく、魅了させる美貌を持つのがずるいと思いながらも絢瀬がステラを宥めながら蔵人に抗議しているが彼にとっ

てはどうでもよさそうだ。
　下手をすれば失血死しかねなかった大怪我から意識を取り戻したことに対しては何も触れず、一輝に対して棘のある言葉を用いてくることに対して、彼らしいなどと思いながら一輝はその言葉を肯定した。

「それに関しては肯定も否定もしないよ蔵人。実戦で緊張して判断が鈍ったなんて言い訳は自分が未熟な証拠だから。でも、だからこそ僕はまだまだ強くなれる確信をあの試合で持てた。」
「…ケッ。持ち前のポジティブは健在ってか。」
「当然。それが僕の生き方だから。蔵人も聞いたよ、僕にリベンジするために綾辻海斗さんに弟子入りしたんだって？」
「――ッ!?て、てめぇなんで知って…お前かァ!?絢瀬ェ!!」
「ふふっ。隠さなくたっていいじゃない蔵人。戦ったらすぐに黒鉄君にバレるんだから問題ないでしょう？」
「……な、なぁ絢瀬。お前ひょっとして今朝のことまだ怒ってんのか？」
「一体何の話をしているのかな蔵人？予定時間に起きれなかった僕に対して何のアクションも起こさずに君が講義を受けに行ったことなんて気にする訳がないじゃないか」
（気にしてるな）
（気にしてるわね…）

　どうやら絢瀬は寝坊したというのに蔵人に起こしてもらえず、授業を結果的にサボってしまったことにお冠（かんむり）らしい。
　すこし知りたくなった一輝とステラであったが、絢瀬の笑顔が怖くて追求は止めた。触らぬ神に祟りなしである。二人は賢いのだ。
「そ、それにしても海斗さんはよく許可してくれたね。蔵人に対する第一印象は最悪だったと思うんだけど」
「あぁ、それはね。アレから少しした後に蔵人から言い出したんだ。

あの時のことは今でもよく覚えてるよ。本当に驚いたよ。父さんと修行をしていたら突然やってきて土下座したんだもの」
「へぇー…。見た目はやんきーって感じなのにしっかりとしてるのね先輩は」
「……ケッ。別にいいだろあの時のことはよ」

本当に変わった。
一輝は恥ずかしそうに顔を逸らす蔵人を見てそう思った。
彼と初めて出会ったときは師匠と共に綾辻一刀流の道場を訪れた時であったが、彼が道場破りを行っていたのだ。
冷静に相手を見据える絢瀬の父親である綾辻海斗と獲物を狙う様に獰猛な笑みを浮かべる倉敷蔵人の二人の姿は対極的であった。そのまま見ていれば二人とも剣客として仕合を行っていただろう。

『その勝負ちょっと待ったァ!!』

そんな緊迫した雰囲気の道場に己の師匠がズカズカと入りこんで審判を務めたのは今でも記憶に新しい。
一輝も蔵人と戦ったのは完全に巻き込まれた形ではあったが、彼のような剣士もいるのだと勉強になったと前向きに考えるようになっていた。
一輝と蔵人の対戦結果は言わなくとも、彼の道場への弟子入りがそれを示している。彼にとっても良い経験になっているのは確実だ。
むき出しの刀身の如き剣気を放っていた男が、今では落ち着いた清流の如き剣気を身に付けているのはこの二年間で一番変化を感じるところ。通常時の態度は絵に書いたような不良であるが、あんななりでも破軍学園に入学してから授業を無断欠席したことがない真面目である。
念のために伝えておくが、これは一輝の師匠の熱血教育のおかげではなく、綾辻海斗の教えを真面目に受けると決めた彼なりのケジメであった。

「へぇー…人は見かけによらないとはよく言ったものね」
「蔵人はあんな見た目でも講義にはしっかりと出てるのは僕でも最初は驚いたものさ。でも一輝君の扱いを知ったことで先生たちに対して本気で怒って殴りこみをかけようとしたときは、流石の父さんでも止めるのに苦労していたよ。2年前ですでに父さんと互角に打ち合っていたからね」
「…確か『最後の侍(ラスト・サムライ)』って呼ばれていたのよね？イッキから聞いたことがあるわ。非伐刀者でありながら犯罪を犯した伐刀者逮捕に貢献した人で、伐刀者でないことを惜しまれるほどに剣士として優秀だったって」
「その通りさ。僕の父さんは剣士として最高峰の実力者であり、僕の誇りだからね」

えっへん。と自慢げに胸を張る絢瀬。
自慢の父親を褒められて嬉しそうにする彼女も破軍学園においてトップクラスに優秀な剣士であるのだが、彼女よりも上位に君臨する存在が異次元過ぎているのが現状である。
破軍学園最強と冠せられる前七星剣武祭ベスト3。『雷切』　東堂刀華
出場を辞退していたことで評価は受けていないが、3年間負けなし。『剣士殺し(ソードイーター)』倉敷蔵人
実力者を真正面から打ち倒したダークホース、選抜戦優勝候補筆頭。『無冠の武王(アナザーワン)』黒鉄一輝
それに加えて今年からAランク騎士『紅蓮の皇女』のステラやまだ出会ってはないが『深海の魔女(ローレライ)』と呼ばれる期待の新人も加わっているのだ。
絢瀬は自分の実力を過信も慢心もしているつもりはない。
だが客観的に考えてみて、自分が彼らの領域に達するのはもう少し時間がかかりそうだと決定づけた。決して悲観的になっているのではない。むしろ圧倒的な実力差を知りながらもめげずに自分が信じ

る剣を振り続ける覚悟をすでに決めている時点で絢瀬も将来有望な一株である。

「オイ。さっきまで十分寝てたんだ、もう動けんだろ。殺るぞ黒鉄。あの時の借りを返してやらぁ」

「いいね。僕も蔵人がどこまで強くなったのか知りたくなってたんだ。場所はどうする？第３訓練場を理事長先生に貸し切ってもらおうか？」

「わかってンじゃねぇか」

「ちょちょちょっ!?さっきの流れからどうしてそうなったのイッキ！貴方はそんな戦闘狂だったかしら!?」

「そ、そうだよ蔵人！時間だって夕方になるんだから、明日でも問題ないよ！課題だってあったでしょ！」

「ンなもんメシ食ってる間に済ませたに決まってんだろうが」

「んなっ!?は、早すぎる…!!」

蔵人の才能の無駄遣いに驚愕する絢瀬を他所に、獰猛でありながらも嬉しそうに笑みを浮かべた蔵人は高笑いする。

すでにステラの異議なんてものは彼の耳には入っていない。

彼からしてみれば黒鉄〉〉〉〉〉越えられない壁〉〉ステラのレベルで優先順位がつけられていた。

「ククク、ハッハッハァ!!待ちに待ったぜこの時をよぉ！走るぜ黒鉄ぇ!!」

「当然！負けないよ蔵人！」

「ちょっ…待ってよイッキ～!!」

「はぁ…。あとで確実に理事長からどやされるな。……まぁ仕方ないか。蔵人があんなに嬉しそうにするのを見たら、止められる訳がないよね」

全速前進で部屋から出ていく二人を慌てて追いかけるステラ。

それを見ながらやれやれと追いかける絢瀬も歓喜の感情を浮かべていた。

尚、３０秒後に見舞いに来ようとしていた理事長　真宮寺黒乃が、近所迷惑だと駆け抜けていた二人に拳を落とすのはまた別のお話。

八刀

『大変お待たせ致しました！数多くの試合をこなしてすでに会場のボルテージも最高潮！この対戦カードも見ものだァ!!我が破軍学園内での対戦成績は５０戦中４５勝５敗！敗北した相手は学園きっての優勝候補であります《雷切》や《狩人》と言った猛者のみです！前回の七星剣武祭にも出場し、見事廉貞学園代表の一人を打ち倒しており、今選抜戦においてもトップクラスの実力者！三年・阿古屋（あこや）　鐘総（かねふさ）選手ッッ!!』

「いったれー鐘総!!」

「お前なら絶対に勝てるぞ!!」

「おう！任せとき！お前らの分まで勝ち進んでやるよ！」

会場に現れたのは身長１８０センチの長身と槍のリーチを使って対戦相手を穿ち、勝利をつかんできた青年。

さっぱりとした性格の彼は誰に対しても感じが良く、学園内でも大層な人気を有する存在だ。

拳を掲げて入場する姿に応援する生徒達はより一層歓声をあげた。

『そんな実力者に対する選手は今我が校で知らない者はいない注目の騎士・黒鉄一輝選手の妹にして、《紅蓮の皇女》に次ぐ今年度次席入学生！試験官すら圧倒するレベルの魔力制御力はすでに学生が為せるものでなし!!今選抜戦初出場！その実力を阿古屋選手に突き立てれるか!?一年《深海の魔女（ローレライ）》黒鉄珠雫選手ッッ!!』

沸き立つ会場に向かって一人の少女が中央へと歩みを進める。

短い銀髪に、淡い翡翠色の瞳を持つ。全体的に色素の薄い儚い雰囲気が、人を強く惹きつける美少女。

そのはずなのだが、彼女に対して黄色い歓声をあげる生徒は誰一人として存在しない。

そのようなことをすれば自分の身に災難が降りかかることが容易に想像できるほど、彼女が纏う気配が鋭く、そして冷たいものだったのだ。

「ずいぶんと落ち着いてんな《深海の魔女(ローレライ)》」
(なんやこいつ、ほんまに一年か…?前大会出場者よりも威圧感が半端ないやんけ…っ!)
普段の相手からは決して感じ取れない気配に冷や汗が垂れる。
全力で挑まねば、自分の体が無残な姿で屍を晒すのではないかというイメージが脳裏に浮かびながらも霊装を展開する。
試合開始の合図はまだ言われてはいないのが、今すぐ動けと本能が指令を発していた。
(それはあかん。まだ合図もない。まだ動くなよ…俺の身体…)
槍先を下へ向けながら構えを取る。
全神経を集中させ、目標のみを開始と同時に穿つための動作。一撃で終わらせるつもりだった。
「貴方…やる気なのね?」
そんな緊張感を抱いている阿古屋選手を他所に、対峙している黒鉄珠雫は問いを投げかける。
なぜ無意味なことをするのか。無表情ながらも、阿古屋はそんな感情を感じ取った。
「そんなのやるに決まっとるやんけ。試合なんてもんはやってみんと結果はわからん。にしても随分と余裕やな嬢ちゃん。まだ開始の合図は鳴ってないで?」
「そう…」
阿古屋の宣言を聞いた珠雫の表情が変わることはない。
やる気だとわかった珠雫は自身の霊装である小太刀型霊装《宵時雨(よいしぐれ)》を構えたことで審判が構えた。
『それでは!試合開始ですッッ!!』
それは開始と同時。
珠雫はたった一言、言い忘れたようにつぶやいた。
「なんて無意味」
会場が、停止した。

「…これが試合の結果です」
一輝とステラのクラスメイトである日下部加々美（くさかべかがみ）は先ほどまで流れていた映像を止めてテレビの電源も落とした。
新聞部に所属し、ジャーナリストを目指している彼女にとって、次席で入った新入生の情報はとても興味深かったに違いない。
映像としてしっかりとデータを残しているものの、彼女の顔色はとても良いとは言い切れないものだ。
「…すごいわね。イッキの妹さんはいくらアタシでもここまでの魔力制御はできないわよ」
「うん。正直ここまで成長しているとは思わなかった。実力も、考え方もね。まだ入学して一度も会ってはいないけど、あの感じだと仲良く家族で団欒なんてことはできないだろうね」
「黒鉄君の妹さんか…どうするの？」
「どうもこうもねぇだろ絢瀬。面倒なら潰して無干渉なら無視を決め込めばいいだろうが」
「いやぁ流石にそれはできないよ。そんなことしたら父さんだって黙ってはいないから」
先ほどの映像は自分たちにとっても脅威となる内容だった。
試合開始と同時に速攻を仕掛けた阿古屋。
一年だからと手心を加えず、持ち前のリーチと速度を生かして寸分の狂いなく心臓へ槍先をねじ込んだ。
相手がどんな手を打ってくるかわからない状態で迷いなく殺しに

動けた彼も、伐刀者として相応しい判断力と実力を備えていただろう。それまでは良かった。
相手が悪すぎた。
「《青色輪廻(あおいろりんね)》。自分の身体を気体化させてあらゆる物理攻撃を無効化する技…。正気じゃないわイッキの妹さん。試合中に寸分の狂いなく、気体化から肉体を元に戻す。そんな芸当を澄ました顔でするなんてまともじゃないわ」
イッキの解説がなければステラだけでなく、絢瀬も、蔵人も理解が出来なかっただろう。
心臓を潰し、確かに大量の出血が会場を朱く染め上げた。
会場から悲鳴も上がる中ですぐさますべてが霧に変わり、珠雫が再生され、同時に攻めていた阿古屋は氷像となって敗退した。
普通に考えれば幻術かなにかを会場全体にかけ、幻を見せてると考えるほうが無難。だがそうではなかった。
槍が心臓に入った時、確かに珠雫は一度死んだのだ。
一度死んだ後に発動し、数十兆の細胞一つ一つを誤差なく再生させる。それが黒鉄珠雫が見せた技の正体だった。
その技が一体どれほどのものなのか。それは解説役として呼ばれていた現世界ランキング3位《夜叉姫》西京　寧音ですら言葉を失っていたことが全てを物語っている。
物理攻撃の完全無効化はとても魅力的であるが、それに伴うデメリットが数段上の技を平然と行う精神力こそ、今の黒鉄家が生み出した化け物(天才)と言ってもいいだろう。
「…悔しいけど、今のボクが彼女に勝てるイメージが一切わかないな。どれだけ斬っても、首を飛ばしても、胴を割っても素知らぬ顔で修復されたらどうしようもない」
「広範囲を高火力で押しきれるなら問題はないかもしれねぇが、それができるやつが世界でどれだけいるかってことか」
伐刀絶技(ノウブルアーツ)があっても斬撃系である絢瀬と蔵人は渋い顔をやめられない。
ロングレンジを得意とする伐刀者を倒すにはクロスレンジを制す

るのが前提としてある。だが《青色輪廻》はその選択肢を完全になくす荒業だ。
「自分の眼で直に視ても未だに信じられないのが現状…。正直破軍学園が誇る伐刀者《雷切》の名を持つ東堂刀華さんが相手だったとしても、負けないのではないかと思ってしまうほどに、です。」
同年代の加々美は試合後の彼女の表情を思い出して強く腕を抱える。
戦いの素人であってもわかるくらいに、彼女の眼は冷たすぎた。
世界全てが無意味に見えているかのように。
「そうであっても僕は勝つ。例え実の妹であっても。七星剣武祭で優勝するために、僕のような人間でも伐刀者になれることを証明するために、そしてなによりも…自分を信じてくれる皆のためにも、勝ち進んで勝ち進んでみせる」
一輝の眼に恐怖はない。
物理攻撃に特化している一輝と物理攻撃を無効化する珠雫は言わずもがな相性は最悪だ。
だがそれだけだ。
人が使う以上、どんな技にも綻びがある。欠点がある。なにより、それで諦めていたら七星剣武祭で優勝なんて不可能だ。
『自分を信じない奴なんかに　努力する価値はない!!』
恩師が最初に告げてくれた言葉に一輝は救われた。
元々伐刀者に必要なものは何も持っていない男だった。だがそれでも諦めず、努力に努力を積み重ねた結果、1分とは言えどAランク《紅蓮の皇女》にすら届く刃を手にしたのだ。
だからこそ、これまでも、これからも一輝に対してどんな災難が降りかかろうとも、決して諦めない。
驕らずに忍び、困難に耐えてでも事を成す。すなわち〝忍道〟。
一輝は己の根底にある忍道を改めて確認し、座っていた椅子から腰をあげた。
「さてと、いい時間だしご飯食べに行こうよ。ここで閉じこもっていても良い打開策は思いつかないんだ。気分転換も兼ねてさ」

「――…ケッ。テメェは昔からそういうやつだったな」
「…ふふっ。でも確かにその通りだね」
「それならイッキ、商店街にあって気になっていたお店に行きましょう！今アタシも沢山食べたい気分なんだから！」
「あ、あの～先輩？私は…？」
「折角だし一緒に食べよう。僕達は友達なんだから」
「いいんですか!?ありがとうございます先輩！」
　重たい空気を変えようと提案をする一輝に対して確かにそうだと同意する三人。
　それに対してどうすればいいのかわからなくなっていた加々美へ朗らかな笑顔で手を差し伸べる一輝を見て、ステラの目が冷たくなる。
「…まったく、どうしてイッキは…」
「まぁまぁそこが黒鉄君の魅力でもあるんだから、ね。心配しなくても黒鉄君がステラさんから離れていくことはないから安心しなよ」
「～～っ！そ、そんなことを心配してるんじゃないわよ!?た、ただ…アタシだってイッキにそんなことといわれたいだけだし…」
　人に聞かれない様に呟きながら顔を真っ赤にするステラを他所に、すでに男性陣は部屋を出発していた。
　Aランク騎士《紅蓮の皇女》ステラ・ヴァーミリオン。
　この破軍学園において彼女はすこしだけ不遇枠に収まってしまったようである。

――――

「…やっぱりここにいたんだね。刀華」
場所は移りとある修行場。
滝に打たれながら座禅を組んで精神統一を行っている少女がいた。
霊装を足に載せて両端に手を添えることで滝水の勢いで流されない様にしながら、環境と一体化するかのように自然体で座っていた。
そこに足を運んだのは小柄な少年。
子供と言われても仕方がないほどに身長が低いが彼も破軍学園の3年生だ。
滝に打たれる女性を視界にいれると、やっぱりここにいたと呟きながら声をかけた。
「――…うたくん。どうしたの？」
「うーんこの。わかってたけど、刀華は集中しすぎ。全く…後輩クンの試合を観て凄く滾っているのはわかっているつもりだけど、詰めすぎて壊れないようにしてよ？カナタ達も心配してるんだからね」
「うっ…ごめんなさい」
集中し、凛とした雰囲気はどこへやら。
自分の知り合いの名を出されて諌められたことで、ここ数日の己の行動を反省しているのか素直に謝罪を行った。
七星剣武祭の出場をかけて行われる代表選抜戦。
新理事長の元、新たな体制で実行されたこの選抜戦において、出場者は一定の優遇措置がある。それが選抜戦期間内において講義免除だ。
日本でも数少ない伐刀者養成学校でもある破軍学園には相当数の学生が存在する。
全生徒が参加するわけでは当然ないものの、それでも試しに出場するものや、本気で代表を目指すものなど様々だ。
そのなかでシステムからランダムで選ばれた生徒は決められた時間に会場へと足を運んで選抜試合を行う都合上、本来は講義と被ってしまう不具合も発生してしまうのだがそんなことをしてしまえば学

生は選抜戦に集中することが出来ない。
そのため選抜戦期間内は出場選手は講義を免除され、己を高める及び休息に充てる期間が設けられているのだ。
それをフル活用しているのか先ほど声をかけに来た少年――御祓泡沫（みそぎうたかた）に諌められた女性――東堂刀華（とうどうとうか）なのである。
来日初日に行われた《紅蓮の皇女》戦。
選抜戦の《狩人》戦。
そのどちらも観客の予想を大きく破り、勝ち星を挙げた今話題の生徒。《無冠の武王（アナザーワン）》黒鉄一輝。
破軍学園最強の名を持つ刀華にとって、滾らないはずがない。
どちらも映像ではなく、最前線で試合を観戦したから尚のことだった。
禁術――八門遁甲の陣
そして《一刀修羅》
黒鉄一輝が持つ禁じ手の技術と唯一無二の伐刀絶技（ノウブルアーツ）。
すでに彼女はその異端さを理解し、対抗すべく修行へと身を投じていた。
昨年と同じように講義に出る時間も惜しい。生徒会会長であっても、その役割すらも置いておいて己を高めたい。
その欲求に抗いきれず、刀華自らが親友である生徒会会計　貴徳原（とうとくばら）カナタに頭を下げて、一時的に教室から身を離した。
「まぁ刀華はそんなに思いつめて自傷行為に走るなんて思ってないからね。カナタだってそれをわかっているから刀華の話を受け入れたわけだし」
「そう言ってくれると嬉しいな。でも改めてごめんね。私の我が儘で迷惑をかけて」
「それは違うよ刀華。ボクたちは刀華が頼み事をしてきたこと自体はすごく嬉しく思っているんだからね。いつも自分が率先して抱え込んでいたからボクも救われていたわけだけど、こういう時に頼られないほうが親友として、幼馴染として悲しくなるから」
刀華と泡沫、そして先ほどから名前が挙がっているカナタは幼少期

に過ごした養護施設「若葉の家」からの付き合いがある親友だ。
幼少期から刀華は多くのことを背負い、解決してきた精神的にも母親的な存在だった。
頼られることはあっても頼ることが極端に少なかった刀華が口に出した数少ない頼み事。それを二人が拒絶するはずがない。むしろ普段からもっと頼ってほしいとも考えていた。
「…うたくん。ありがとう」
「どういたしまして刀華」
そんな意思を察した刀華は素直に感謝の言葉を泡沫へと伝えた。
修行を始めて少し刺さっていた棘が抜けて、よりすっきりとした気持ちになった。
ほとんどの時間を修行へ費やしていたが、今ならより踏み込んだことが出来る。そう感じた。
「刀華の次の試合も決まった。そろそろ学園に戻ってサイクルを戻しておかないとね」
「そうだね。すぐに戻る準備をする…その前に、うたくん」
濡れた行衣(ぎょうい)から制服へ着替えて学園へ足を進める前に刀華は先ほどまで身を投じていた滝へと体を向ける。
彼女が滝行を行っていた場所は水の流れが強く、ドドドドと大きく音を鳴らしながら大量の水を常に叩きつけている。
改めて見れば、強固な断崖が堅牢な城壁を彷彿とさせた。
「…刀華?」
そんな天然の要塞に向けて刀型の固有霊装《鳴神(なるかみ)》を構える刀華に泡沫は困惑する。
そしてすぐに気を引き締めて、刀華の一挙手一投足を見逃さないように眼に魔力を集めて出来る限りの強化を施した。
幼い頃から彼女が鍛えている姿を最も身近に見続けてきた少年は理解したのだ。彼女がこれから修行の成果を自分に見せるために、声をかけたのだと。
彼女は強い。それはわかっている。
刀を振る際の技も理解している彼から見ても、それは普段彼女が用

いる姿勢ではなかった。
腰を据えた構えではない。明らかに前傾姿勢だ。
それだけではない。
構えと同時に彼女の鞘から視認できるほどの稲妻が奔る。
そこまでは普段と一緒だ。だが、明らかに違う。
鞘から生まれた稲妻が腕を伝い、刀華の全身を薄く覆った。
「チッ、チッ、チッ」と少しずつプラズマが迸(ほとばし)り、彼女がすこしずつ暗くなってきた世界を白く焼いていく。
刀華の後方で見ていた泡沫でもその熱量を感じた時――――大気が爆砕した。
攻撃で発生したであろう衝撃が暴風へと変わり、辺りに存在する存在を吹き飛ばすが如く襲い掛かった。
曲がりなりにも身体強化を行っていなければ、その余波で泡沫も吹き飛ばされていただろう。
響く轟音が収まり、動作から起こされた土煙が収まった時、泡沫の目に刀華が得た修行の成果を理解する。
「…は、ははは。これはすごいや…」
「一先ず、これにて修行は完了。見ててねうたくん。私、今度こそ優勝するから」
膨大な水が衝撃で吹き飛び、断崖が二つに分かれていた。
音からしてたった一振り。
一刀の元、断崖を切り崩したのだ。
少し前の実力ではできなかった結果に満足した刀華は刀を収めて滝から背を向ける。
刀華の姿が小さくなったころ、斬られて飛んでいた水源から水が溢れ出し、不規則な水音を奏で始める。
少し呆けてしまった泡沫はその音で正気を取り戻す。
対戦相手が映されている刀華の液晶端末を渡し忘れたことに気づいて慌てて泡沫は刀華の後を追った。
液晶端末にはこう表記されていた。

『東堂刀華様の選抜試合のお相手は、三年三組・倉敷蔵人様に決定しました』

九刀―刃を研ぐ者達

限界。

これ以上あるいはこれより外に出られない境のこと。

予め定められている「限度」とは違い、「限界」はそれ以上進むことが出来ないと言った意味合いを指すことが多い。

これまでの長い歴史において数多くの伐刀者がこの限界に辿り着く前に妥協を行う。自分には無理だ。これ以上努力する必要はない。そんな感情に抗いきれず、歴史の中に埋もれていった。

最後まで抗っても限界に至れたものが果たしてどれほど存在したのかはここで語ることはないが、少なくとも歴史に名を遺している偉人達はこの領域に至ろうと、日々研鑽を怠らなかった者達だったであろう。

「フゥー…フゥー…フゥー……まだだわ。アタシの全力は、こんなものではないはず。もっと出せるはず…あの時のように」

人払いを終えた夜の訓練場で、己の限界に至ろうと《紅蓮の皇女》ステラ・ヴァーミリオンは一人で特訓に明け暮れていた。

普段一輝と行っているトレーニングだけではない。

彼とは違う膨大な魔力をより繊細に、より強靭に運用すべく行う特訓は一輝の力を借りることは難しい。

確かに伐刀絶技（ノウブルアーツ）である《一刀修羅》を使用するには緻密な魔力操作、そしてリミッターを外した際に発生する魔力の増大化による酔いに近い症状を耐える精神力。これがなければ為されないものだ。

しかしそれは一輝が総魔力量が乏しいために修行を始めてから生み出した独自のものであり、そこで培ったものを常人レベルの魔力を有する人へ教えようとしてもそもそもの前提が違う。

肉体にかかっているリミッターをこじ開けて魔力を上げる修行なぞ、普通の人がやろうとすればまずは魔力を空っぽにしてから取り組まなければならない。

魔力が十分にある分には無意識に脳が制限をかけて負担を軽減し

ようとする。
必死になって魔力を吐ききろうとすれば、吐ききる前に神経が焼けるような痛みを覚えて挫折するだろう。
ステラだってその枠に当てはまるのだ。
一輝は今となっては容易く肉体のリミッターを外し、その上で翌日以降なるべく悪影響が出ない様に調整しているがそもそもがおかしいのだ。
リミッターを外しているにも関わらず、肉体が崩壊しない様に制御して魔力を引き絞って全力で戦う。それを戦いで多用することが出来るのは世界中探しても一輝ぐらいなのではなかろうか？
「イッキの技を思い出すこと…。どうやって発動していたのか…まだよ。まだ集中が足りてない…」
それでもステラは黒鉄一輝を越えると決めた。
体術でも負けたくはないが、それ以上に伐刀絶技（ノウブルアーツ）で負けたくない。
あの試合の後、ステラなりに反省点を考えていたのだ。
ああ動けばよかったとか、一輝をEランクとして甘く見ていたとかではない。仮に理想的に動いていたとしても彼ならば即座に対処されて同じ結果になっていただろうから。
ではどこに着目したのか？
それは魔力戦。伐刀絶技（ノウブルアーツ）での戦いだった。
最初に戦った時、自分にとっての最強技《天壌焼き焦がす竜王の焔（カルサリティオ・サラマンドラ）》は一体どのようにして破られたのか。
八門遁甲の陣で強化されていたから斬られたのではないか？答えは否だ。
『えっ？あの時どうやって破ったかって？…あはは。確かにステラとの闘いで僕は八門遁甲の陣を使った。だけどそれだけじゃないんだ。三門を開放したうえで、一瞬だけ《一刀修羅》を重ねたことで身体能力と魔力を数段引き上げて切り伏せた。ただそれだけだよ』
ステラが最も敬愛し、そして大好きな青年は、感づかれたら対処されそうだったからとすこし空笑いしながら答えてくれた。
正直驚愕に驚愕を重ねていたあのタイミングでは対処も何もな

かったのだが、それだけ一輝が自分を評価してくれていたことが嬉しく感じた。
ステラがヴァーミリオン皇国から来日してまだ間もないが、彼女はすでに数多くの経験をしてきた。
今まで受けたことの無かった完敗による悔しさ。
心から一生を捧げたいと思える大切な人との出会い。
地位に縛られずに対等に向き合ってくれる友人。
思わぬうちに天狗になっていた自分を打ち倒せる実力者が複数人いる事実。
これだけでも日本に来てよかったと心から言えるし、何より皇国に留まらず留学を選択した昔の自分が誇らしい。
ステラの人生を大きく変えたこの出会いを、このまま停滞に使ってはいけない。
（集中――。アタシの魔力を全身に行き渡らせて、余計なものは削ぎ落す――）
大剣を掲げるように構え、大きく深呼吸を繰り返す。
目を瞑り、視覚から来る情報を遮る。深部に意識を向けることで聴覚から来る情報も遮断する。
普段であれば溢れ出た魔力を炎に変換して霊装に纏わせているところであるが、まだ堪（こら）える。
体内に内包される魔力がマグマの如く燃え滾り、早く解放しろと脳内に警告を飛ばしてくる。
（自分の力と向き合う――。幼少の頃に制御するためにがむしゃらに特訓を重ねたあの頃と同じ…）
思い返すは幼い頃の自分。
幼いころから宿っていた自分の力は明らかに過剰であり、それを認識させるように何度も、何度も自分の力で大火傷を負ってきた。
そこから何年もの時間を費やして制御できるようになり、《天壌焼き焦がす竜王の焔（カルサリティオ・サラマンドラ）》を扱えるようになったのが先ほどまでの自分だ。
並の抜刀者であればステラから溢れ出る魔力に対抗できず、ステラ

の為すがまま蹂躙される。だがそれだけでは勝てない存在を知ったことで、ステラは自分の先に手を伸ばすようになった。
（確かに制御は出来た。だけどあの頃を思い返したら、今よりも火力があったはず…）
摂氏３０００度だけでも高熱なのだが、当時はより広範囲を引火させ、炭化させることも多々あった。
制御することばかりに目を向けたばかりに、本来の火力を出せてないのではないかと、ステラは思い立ったのだ。
「〜〜〜ッッッ!!」
Ａランク騎士に位置するステラであっても、過剰に魔力をため続けることはできない。それを表すように体内で暴れ狂う魔力が熱となり、炎なってステラの肌を内側から焼き始める。
だが折れない。
（まだ…まだだ！アタシはまだやれるはず！やれるんだ!!）
もっとだ。もっと熱かったはずだ。
火災の中に身を投じる熱さと、そのあとの感覚を失っていく瞬間をステラは今でも覚えている。
だからこそ自分はまだ潜れるはずだ。
もっと…もっと――――!!

「そこまでさプリンセス」

最深へと至ろうとするステラの意識はたった一言で引きずりあげられた。
目を開かせて驚くステラは背中に当てられた手の感触を追いかけるように振り向く。
「――ネネ先生」
ステラを強引に引っ張りあげた張本人は《夜叉姫（やしゃひめ）》の名を持つ西京寧音（さいきょうねね）。
背中に当てていた手から魔力を流し、臨界点に達してステラを消し炭にしようとしていた魔力にぶつけることで霧散させたのだろう。

苦笑を浮かべながらステラを見る姿は彼女が普段見せる態度とは全く異なり、教育者としての顔だった。
「やれやれってところだよ。折角ぶらりと時間を潰そうと思ってたのにこんな時間に生徒が一人で活動しているなんて」
「…ネネ先生。どうして止めたんですか」
「そりゃ止めるさね。くーちゃんに頼まれた身とは言え、破軍学園に所属する教育者だよ？」
余計なことをしないでほしい。
そんなステラの視線を受けて、あえてわかる様に寧音は溜息をつく。
「今、何をしようとしてたか理解してるかい？」
「自分と向き合うために必要なことです」
「その結果、辺り一帯を消し炭にしていいと思ってんのか？」
「――……それは」
自分の発言に寧音が語尾を強めたことでステラは言葉に詰まる。
寧音の言うことは最もだ。
幼いなりに抑えていたものをある程度成長した今の自分が完全に解き放てば、爆弾が投下された後のようにクレーターが生まれていただろう。
だがステラが行っていたのは自暴自棄でなく、出力を上げるために文字通りの限界まで溜める特訓であったために寧音の言い分に異論を唱えたかったのだろう。
「ステラちゃんがやろうとしたことは大まかに理解はした。ただね、それは一人でやるもんじゃない。限界まで溜めに溜めて、制御できりゃ確かにいいさ。だけど失敗した際は一体だれが責任を取るんだい？」
「……」
「学園が監督責任を問われる？ヴァーミリオン皇国が身内の不祥事として始末に追われる？それとも…自爆テロをしようとした生徒を止められなかった同室者が責任を丸被りするか」
「――ッ!!?」

その異論も寧音がもしもであげた発言でステラは自分の浅はかな行動をしていたことを理解した。
ステラと同室の者なぞ黒鉄一輝を除いたら他はいない。
身を炭に変えようとしていたエネルギーを制御できると思い込んでいたが、それがもし制御できなかった際の被害。この処理はどこに向かうのか。
考えればすぐにわかるはずだった。
一輝の過去を、迫害されていた理由を知っている者なら、そんな美味しい餌に食いついてくる存在もわかっているはずだからだ。
「…ごめんなさいネネ先生。アタシが浅はかでした…！」
「いや、うちはただ注意のつもりで言ったから…そこまでされると逆に申し訳ないんだけど」
本人も自爆するつもりであんなに魔力をため込んでいたわけではないことは寧音もわかっている。
なので実際にステラを罪に問うなんてことはしないし、出来るはずがない。
ただ一人で危険なことをするなと注意するつもりで言ったのだが、自分の間抜けさに涙を流しながら謝罪を行うステラを見てちょっと悪いことをしたなと軽く頬を掻きながら、明後日の方向を見るしかなかった。
「まぁ反省したってことで次回からは気をつけるようにすればいいよ」
なので寧音はさっさとこの話題を終わらせることにした。
注意しただけでここまで罪悪感を抱くのは流石に初めての経験である。
「でも正直なところなんでここまでするつもりになったのさ？言うまでもなく、ステラちゃんは紛れもない天才さ。こんなに追い詰めるようなことはする必要はないんじゃないかな？」
「それでは駄目なんです！」
寧音の問いかけにステラはすぐさま否定する。
世間では世界最大の魔力を持つ天才だと持て囃しているが、ステラ

自身そこで満足していない。
「確かに破軍学園の多くの生徒はアタシには勝てない。これは紛れもない事実ですし、慢心じゃないです。でもそれだけなんです！このまま只々学園生活を過ごしていても、アタシはイッキを越えられない！常に自分の限界を見つけて乗り越えていくイッキに、今のアタシは追いつくことすらできない…背中を見つけることすらできないほどの差がアタシとイッキの間にある！」
　嗚咽しながら内心をさらけ出すステラは続ける。
「それが嫌で何度もイッキに内緒でアヤセ先輩やクロウド先輩と戦ったりもした！思いつく行動をしてみた！結果が出なくても、逆に自分の弱さを教え込まれても、それでも続けました。それが自分のためになると信じて…でもわからないんです。本当にこれが正しいのか、成長できてるのかって思ってしまう！本当にアタシはイッキを越えることが出来るのかって…。不安で、不安で仕方がないんです…」
　断言してもいいが、ステラは寧音が教えることがないほどに、異次元のポテンシャルを秘めていた。
　生まれついての強者であり、そこからさらに己を高めることが出来る真の強者（つわもの）と呼ぶべき存在。
　ステラが用いる剣技《皇室剣技（インペリアルアーツ）》は習って習得したものだが、伐刀絶技（ノウブルアーツ）は完全な独学であり、それを周囲に被害が出ない領域まで制御できるようになったのは紛れもなく、ステラ・ヴァーミリオンという存在が天才であることの証明だった。
（…確かに今の彼女では越えれない。だけど仮にあと3年経てば並び立てるよ。なんて耳障りのいい言葉が聞き入れられる年頃じゃないよねぇ）
　凡人が天才に対して下手なクセをつけてしまうのが最悪な結末だ。
　だから寧音もステラに対して技術がどうのこうのなんて発言はできない。
　現に対人戦で超一流の武人である黒鉄一輝ですら、ステラの剣技や戦闘動作に対して一切の無駄がなく、僕が口を出せることは存在しないと断言している。

（だからと言って落ち着くべき、なんて発言は宜しくないなぁ）
一定のレベルに達すると成長が止まったように感じることがある。
それは最初は段差の少ない階段を上っていくように成長するが、続けていけばいくほど段差が大きくなり、飛び越えれない壁に変わっていく。
壁を壊すなり、よじ登っていくなり、人によってそこからの方法は多々存在するので、他人の意見はあくまでも一つの可能性にすぎない。
見えない壁にぶち当たったのはステラにとって初めてなのだろう。
彼女はまだ若い。
彼女のポテンシャルを考えれば今の生活でもいつかは壁を越えていくだろうが、その間に一輝との距離が離れ続けていくことに耐えられないからこその苦悩なのだ。
誰もいない真っ暗な空間でただ一人、どこまで続いているかわからない道を進み続けるようなものだ。
アドバイスを聞こうにも、プロから見ても完璧すぎて口を挟むことができない。
技術を増やそうにも、教育者のほうがすぐにレベルが低くなる。
並の努力では彼女の才能にはじき返されて利がある証明すらできない。
そんな生活をあと3年も続けろなんて無責任なことは寧音には言えなかった。
一輝が《狩人》を降して学園でも名を知らない者が居ないほどに有名になった辺りから、ステラの焦燥は現実を見せ始めていた。
自分の考えうることはしている。最初に一輝と同じ内容のトレーニングを行った時は盛大に吐いたが今ではしっかりと後を追えるまで成長している。
身体能力は上がったが、技術や魔力は停滞しているのが原因だろう。
このままだと成長が止まってしまう恐怖が彼女を急かしているのだ。

「んー…なら、こういうのはどうだい？」
若者には若者の価値観がある。
寧音だってその時期があったし、そこで悩んで癇癪を起こして殺し合いをしたことも数えきれないほどやっていた。
だからこその提案だ。
「生徒の悩みを解決するのも教育者の役目。だけどはっきり言ってうちがステラちゃんに教えることはなんにもない」
「えっ…それじゃ」
「待て待て。話は最後まで聞くもんだよ」
人差し指を口元に当てて笑みを浮かべる寧音。
訝しげに寧音を見るステラに対し、本当に教えることはなんだけどねと先に告げて今彼女が最も魅力に感じる言葉を出した。
「うちがステラちゃんの相手してやんよ」
その日、破軍学園が所持する広大な敷地の一部が更地と化す。
夜であったがために人的被害は報告されなかったものの、捜査関係者はテロ組織が関わっているのではないかと騒がれた。
破軍学園の理事長が額に手を当てて盛大な溜息を吐きつつ胃薬を服用する姿が目撃されたが、この件が関わっていたかは定かではない。

道場にその男はいた。

数十人は収まるであろう坪にただ一人、中央で正座で目を瞑って集中している。
先ほどまで握られていたであろう木刀は膝先に置かれており、静かに持ち主に振るわれるのを待ちわびていた。
上辺だけの彼を知る者であればその男は別人だと信じることはなかっただろう。
逆立った髪を下ろし、胴着を着崩さずに身に付け、刀身をむき出したかの様な戦意は鞘に収まったように静まっている。
それが出来るのならなぜ普段からそうしないのかと、教育者は嘆いただろう。
だが彼をよく知る者達は今の状態こそ、本来の姿であると断言する。
鋭さ、冷静さ、膂力、判断力。
それらはこの道場に身を置く前とは比べ物にならないほどに成長している。
「蔵人君」
一人道場で神経を集中させるなか、落ち着いた声が蔵人を呼んだ。
「――どうした先生」
目を開くと蔵人の視界に真剣な面持ちをした師が映る。
買い出しに自ら行っていたのか、その右手には買い物袋があった。
「蔵人君がそこまでするほど、次の相手は強敵なのかい？」
倉敷蔵人は綾辻一刀流に弟子入りをしてから幾度となく、目の前の師範と打ち合ってきた。
彼はどちらかと言えば寡黙だ。
一人娘の話になれば嬉々として語りだすが、武士としては多くの言葉を語らない。
これまで一刀流を習う際も、指摘はあれど今のように疑問として言葉をかけることは一度もなかった。
「…負けるつもりは毛頭ねぇが、強敵だ」
「ちなみにだが、どんな相手なんだ？」
「学園最強」

蔵人がそう告げると師範―綾辻海斗はふむ…と顎に手を当てて呟く。
「破軍学園最強か。それは確かに気構える」
「珍しいじゃねぇか先生。あんたから心配してくるなんてよ」
「何、私とて心配することもある。将来の跡継ぎが思い悩んでいるなら尚更な」
「……それ、絢瀬に言ってねぇだろうな？」
「ははは！娘も言葉に出さずとも少なからず察しているだろう。確かに昔はヤンチャしていたが、今では綾辻一刀流で最も強く、そして冷静な男だ。俺の後継者となっても何ら可笑しくは無い」
海斗はいつ娘に告白するのかと茶化してくるが、ここで過剰に反応すればドツボに嵌っていく。そういう存在だった。
「生憎だが今はそんな考えはねぇよ」
「ふむ…　蔵人君らしくない。緊張しているのかい？」
「馬鹿いうな先生よ。俺が緊張するわけねぇだろうが」
海斗の問いかけに蔵人は嗤う。
彼の中にあるのは常に闘争。どちらが強いか、弱いのか。それを決めるのがこれからの戦いだ。
「どうやって《雷切》を喰らうか、考えるのが楽しくて仕方ねぇンだよ」
黒鉄一輝と再会を果たしてからというもの、剣客としての己の調子は最高潮。
すでに幾多ものシュミレーションで《雷切》と斬り合った。
戦場に立つ以上絶対は存在しないが、素直に道を譲ってやる気は毛頭ない。
「今度の試合、見に来いよ先生。綾辻一刀流の神髄を、観客共に教えてやるよ」
溢れ出しそうになる興奮を抑えつつ正座を解いて木刀を振るう。
狙いは《雷切》の首一つのみ。
《剣士殺し（ソードイーター）》、出陣。

十刀―《雷切》ＶＳ《剣士殺し》１

『さぁさぁ待ちに待ったこの試合！開始前だというのにも関わらず、会場は満席御礼の状態です！それもそのはず！今回の試合は我が破軍学園においてもトップクラスの実力者同士の戦い！彼等がここで出会わなければ、両者とも確実に七星剣武祭の切符を手にしている事でしょう！』

会場は早朝最初の試合だというのにも関わらず、席は全て埋まっていた。

座れない者は階段や最上階で立ち見をする方法で試合映像をその目に収めようとするものが多い。

すでにどちらが勝つかの予想をし合いながら試合開始を待ち望んでいる生徒が大多数だろう。

それも当然だ。

素早く最前列の席を確保した一輝達にとってもこの試合は重要なものだった。

「クラウド先輩と生徒会長のトウカ先輩の試合…いよいよね。イッキ」

「そうだねステラ。生徒会長に蔵人、どちらもまだ選抜戦で一度も本気を見せていない二人。どちらが勝っても、強敵だ」

『前回の七星剣武祭出場はしませんでしたが、前選抜戦と今選抜戦で未だ負けなし！他校の実力者ですら歯牙にもかけない実力は健在！周り全てが俺の獲物だと言わんばかりの剣気からは想像もつかないほど的確にその刃を振るってきました！』

実況者の言葉に宿る熱が強くなっていく。

一輝が言葉に出したことは事実だ。

だからこそ。

それが一般生徒でもわかっているからこそ、彼等は待ち望んでいる。二人の英傑の本気を液晶を挟んだ映像ではなく、現実（リアルタイム）でこの目に収めたいのだと。

『今まで手を抜いていたのか？否!!本人に勝ち残る意思がなかったのか!?断じて否!!

破軍学園で多くの生徒はいれど、彼の実力を出すまでに至らなかったその事実ッ!!

その事実に、彼は、倉敷蔵人（くらしきくらうど）は！学園生活が退屈で仕方がなかったッ!!

だからこそ、実況者である月夜見半月（つきよみはんげつ）が言わせてもらいます！』

『だがそれも今日までであると!!』

マイクを強く握りしめ、実況者は会場へ向かって叫ぶ。

それに伴って歓声が一層高まるのは彼に敗れた者達の怨嗟のためか。

それともこれから起こる一大決戦に対しての期待の表れか。

『多くの剣士が彼に挑み、そして敗れていきました。

内に秘めたその確かな実力で、多くの刃を喰らってきたその男についた異名は《剣士殺し（ソードイーター）》！

武芸百般（ぶげいひゃっぱん）の黒鉄一輝選手の友人であり、知る人は知る《最後の侍（ラストサムライ）》の弟子にして綾辻一刀流免許皆伝ッ！

その実力を！この試合で見せずしていつ見せるのか！

Cランク騎士・倉敷蔵人選手入場ッッ!!』

会場のボルテージが跳ね上がっていくなかで悠然と歩みを進める。

隠しているつもりではなかった。

だがこれから戦う相手に見せないつもりもなかった。

だから実況に告げた。

これは《雷切》に対する自分なりの宣戦布告だ。

普段の彼女からすればこれがどう転ぶかわからないが、蔵人は確信していた。

《雷切（彼女）》は必ず乗ってくると。

『対する赤コーナー選手入場ッッ!!』

《最後の侍》の縁者と知って驚く者。知ったが故に歓声をあげる者。

知らずに状況が読めてない者。
それらすべてを置いて、実況は進む。
『破軍学園における対戦成績全勝！唯一敗れたのは前年度七星剣武祭優勝者！
だがしかし！その試合ですら、彼女の本質を見せることがありませんでした!!』
蔵人が中央で立ち止まったと同時。
開かれた扉から現れる一人の剣士。
『破軍生徒（私達）ならば誰もが言う！彼女の全力を見てみたい!!
二つ名を冠する伐刀絶技（ノウブルアーツ）《雷切》は、いまだに無敗の抜刀術！
本戦でも猛威を奮ってきたその卓越した剣技で、今日（こんにち）の相手ですら切り伏せるのか!?』
静かに、されど力強く歩くその姿は己の剣を一切疑わない姿。
普段身に付けている眼鏡を外し、戦闘態勢へとすでに移行している彼女は笑みを絶やさない。
今不意打ちを仕掛けたとしても、今の彼女であれば難なく対処して手痛い傷を負わせてくるだろう。
『異論を唱える者は誰もいない才色兼備（さいしょくけんび）にして学園の頂点に君臨する生徒会長！
その研ぎ澄まされし刃は、降りかかる剣戟に対してどのような結果を魅せてくれるのか！
破軍学園最強。雷すらも切り伏せるその剣技！今ここで見せてくれ!!
Ｂランク騎士・東堂刀華（とうどうとうか）選手ッッ!!』
二人は直径百メートルのリング中央で２０メートルほどの間合いを開けて向かい合う。
刀華はすでに霊装《鳴神（なるかみ）》を顕現させている。
あとは蔵人が霊装を出せば試合開始の合図が鳴る。
「…この戦いどう見るー？」
「戦績だけで判断することは難しいだろう。会長はともかく、《剣士殺し》も本気を見せていない」

「そうですね。我らが生徒会長であればいつも通り切り伏せるでしょうが、あの一年生黒鉄一輝のご友人。なにが起こるかわかりません」
刀華を後ろから見守るのは彼女が所属する生徒会の面々。
《速度中毒（ランナーズハイ）》兎丸恋々（とまるれんれん）
《城砕き（デストロイヤー）》砕城雷（さいじょういかづち）
《紅の淑女（シャルラッハフラウ）》貴徳原カナタ（とうとくばら）
そして《観察不能（フィフティ・フィフティ）》御祓泡沫（みそぎうたかた）
いずれも破軍学園の序列トップを独占する者達だ。
戦うことがない泡沫以外は前七星剣武祭に出場する実力者であり、多少の見方は違えども生徒会長が勝利をするだろうとの予測で一致していた。
「負けちゃったアタシがいうのもあれだけどね。副会長はどう思うのかな？」
「考えるまでもないさ。刀華が勝つ」
彼の中にあるのは確信。
幼き頃からの付き合いである泡沫には、今の彼女が何を考えているのかわかる。
「彼には申し訳ないけど、刀華が勝つ。なにせ、彼女には背負っているものの重さが違うんだからね」
普段とは違い、真剣に試合を観る泡沫はそう断言するのだ。

「感謝を。倉敷くん」
「あん？」
「今回の選抜戦において、私は貴方達の試合は目に入れています。《狩人》戦だけではない。兎丸さんを破った貴方の試合もしかと拝見させてもらいました。そしてずっと思っていた。貴方達と戦いたいと！」
バチバチと刀華の身体から雷が鳴り始める。
早く斬り合おうと言いたげな彼女の姿勢を見て、蔵人は軽く笑った。
「ンなもんこっちも同じだ《雷切》」

蔵人が持つ野太刀霊装《大蛇丸》を右手に出し、肩に担いだ。
「ここでテメェを喰らってやるよ!!」
跳躍し、霊装を振るう。
刀華はそれを待っていたように逆袈裟切りで応戦した。
剛腕一閃。
まずは小手調べと言わんばかりの蔵人の斬撃は爆ぜるが如く刀華に襲い掛かったが、即座に居合斬りで防がれたためにそのまま返された反動を利用して後ろへと飛ぶ。
試合開始の合図すら待たない不意打ちの一撃は彼女にとっては対処が容易なものだったようだ。
『ちょちょちょ!?タンマ!タンマですよ!試合開始の合図はまだ出していません!!』
『無駄無駄。やめといたがいいよ。今のは合図が遅くなったのが悪い。ああなれば審判がどう判断しようが止まらない。さっさと合図出して観戦してたがいいと思うよー』
『えっ!?え、ああああもうわかりました!試合開始してます!!』
解説役として呼ばれている寧音は反則など無意味と切り捨てて司会を進めるように促した。
ある程度の力量を持った剣客なら彼女の言い分もわかる。
最大にまで高められた剣気を前にして、他人の合図など待っていられないのだ。
「――――ッ!」
「っ――――!!」
一手、二手、三手――
蔵人の高められた反射神経が、刀華の研ぎ澄まされた感覚が、相手の斬撃を往なし、そして反撃する。
ガガガガガと霊装同士が打ちあい、僅かながらに火花を散らす。
動体視力に優れた者でなければ、彼等の周りに只々連続して火花が生まれているようにしか見えないだろう。
『すごい!すごいです!!連撃連撃連撃連撃ィ!!試合が始まって1分も満たないこの瞬間!両者の間に火花が散る!あまりの速さに正直私

は目で追えません!!』
『いやぁ正直本当にやるね。《雷切》は当然だけど、《剣士殺し》がここまで食らいつくとは思わなんだ』
これまでの試合とは明らかに異質。
文字通りの次元が違う戦いに、寧音の軽い態度が鳴りを潜めて真面目に観戦をしていた。
「これがトウカ先輩の、《雷切》の実力…」
何度も練習試合を重ねているステラもハイレベルな戦いを食い入るように見つめている。
刀華会長自身隠していないため解説するが、すでに彼女は伐刀絶技（ノウブルアーツ）を使用している。
その名は《閃理眼（リバースサイト）》。
相手の脳内の電気信号を読み取ることで行動を先読みする技。
斬り合い（クロスレンジ）を得意とする彼女にとってこれ以上にない自己強化技だ。
相手の行動を行なおうとする動作を読み取り、即座に対処する技量の高さが無敗を誇る理由。
普通であれば、数手は疎か一手目で見切られて試合が終わる。
だが彼女の対戦相手はすでに十を超える数を打ち合っていた。
それは彼の技量の高さが《雷切》を上回っているのか？そう決めつけるのは否。
（…蔵人くん。貴方は…）
鍔迫り合いを解除して互いに一旦距離を取る。
圧倒的な技量差があるわけではない。
速さにおいては己が有利。
しかし現に蔵人は刀華相手に互角に斬り結んでいた。
その要因に気づく。
「…驚きました。蔵人くん。貴方…反射神経が常人の比ではありませんね？」
「ハハッ。気づいたか？」
「《閃理眼（リバースサイト）》を使用していなければ、私が致命的なダメージを負っていたでしょう。相手の電気信号を読み取り私が行動するよりも早く、行

動を切り替える。伐刀絶技(ノウブルアーツ)を使わずにその速度、貴方の反射速度は人の領域をすでに超えている」
「ハハハハハッ!!正解だ！オレの神速反射(マージナルカウンター)は他とは全く異なるモンだ。テメェが如何に心を読もうと、オレは動きを見てから二・三手変えられる」
蔵人がステラを幾多も降してきた理由。
如何に裏を掻こうとも、如何に威力が高かろうと、彼の前にはすべての行動が止まって見える。
技ですらない、天に愛された基礎能力。
それが《剣士殺し》たる根底の力。
「喰らわせてもらうぜ《雷切》。テメェのその剣をなァ!!」
蔵人が駆ける。
上段から落とされるノコギリ刃が刀華を斬り裂きにかかる。
その行動をすでに読んでいた刀華は居合からの逆袈裟斬りで対応する。
初撃と同じシチュエーション。
振られた野太刀の剣筋も、動作も、そして技を振った直前の彼の真正面から叩き潰す、その考えすらも。
それを察している刀華も同じように刀を返す。己の雷を刀に乗せて。
（これで終わりです）
人前ではまだ未使用の技術。
師匠に習ったその技は殺傷能力を数段跳ね上げる。
例え固有霊装(デバイス)であったとしても、並の魔力であれば霊装(得物)ごと切り伏せることが出来る強力なもの。
名を雷千斬(かみちぎり)
雷刀が天へと振り上げられる。
試合が開始されておよそ三分。
初めて血飛沫が宙に舞う。

『……な、なな…』

静まり返った会場に、司会の声が大きく響く。

《雷切》と《剣士殺し》。破軍学園でも頂点（トップクラス）の実力を持つ両雄。

一息つく間もない戦いを行ってきた。

ついに事態が動く。

『なんということでしょう！ついに、互角の戦いを繰り広げていた両者ですが、ついに状況が動き出しました!!』

司会を務める月夜見半月（つきよみはんげつ）は剣戟の内容が見えていたわけではない。

しかし、それがもたらした結果はわかる。

『剣客同士の瞬きすら許さぬ高速の攻防！その鋭い一撃が、ついに相手を捉えて刃を通したぁ!!

《雷切》と《剣士殺し》、最初に優位をその手に収めたのは――――』

どれだけ信じがたくても、どれだけわかりきった結果であっても、彼女は大きく声を張り上げてマイクへと言葉を叩き込む。

『――《剣士殺し（ソードイーター）》倉敷蔵人選手だぁぁぁぁぁッッ!!』

観客席から映るモノも、映像に映るモノもそれが事実だと告げている。

中央には得物を肩に乗せて嗤う者と、戦意を有しながらも右腹部を押さえる者。

それは客観的に見て、どちらに形勢が動いているのかを示すには十分すぎる証拠であった。

十一刀―《雷切》ＶＳ《剣士殺し》２

男が頭を下げてきたのは事が済んでから1週間が経過した頃だった。

あの時の気候は大雨。

傘を差さずにその男は、雨に濡れることなど意に介さず只々(ただただ)同じことを繰り返し告げた。

――弟子にしてくれ、と。

初めは当然断った。

彼が自分と一騎打ちするために行った行動を考えれば当然の判断だった。

当時綾辻一刀流を教えていた門下生全員に無差別に襲い掛かり、真正面から才能だけで叩き潰す。

それだけでなく愛娘すらも歯牙に掛けようとしてまで自分との戦いを欲していた。

ある者の介入があったおかげで無事に済んでいるが、それがなければ自分は病室で一生を過ごしていただろう。

彼には天性の才能がある。

それは一目見てすぐにわかった。

ただ力を振るうだけの非行少年であれば俺でも容易に対処できる。

しかし彼に秘められた才は、２０にも満たない年齢ながらも刀に費やしてきた自分の人生を越えようとしていた。

その才能を潰すのは惜しいと考えてある条件をクリアした場合にのみに限り、綾辻一刀流の教えを与えることを許可したことは英断であったと我ながら思う。

この男は、紛れもない天才だと。

――

『今、私たちは！信じられない状況を目の当たりにしています！ですがこれは夢でもありません！紛れもない現実です!!

破軍学園最強の《雷切》がッ！

全試合無傷で勝利を収めてきた東堂刀華選手がッッ!!

ついに負傷したぁッ!!』

「う…うそだろ…？」

「あの…東堂会長が…」

《雷切》の勝利を当然だと思っていた生徒達はその事実に呆然と見つめることしかできなかった。

これまでの戦いで己の間合いに入った者は例外なく切り伏せていた経歴は伊達ではない。

応援する者達の中にも、彼女を打ち倒さんと努力を重ねて挑み、敗れていった者達もいる。だからこそ信じられない。信じたくない。

自分たちと彼女の間に存在し、理解してしまうほどの圧倒的な実力差。

それが彼らの中で少しずつ積み重なり、一つの諦めを生んでいた。

彼女は自分たちとは違い、特別な存在なのだと。

どれだけ努力を重ねても、彼女には届かないのだと。

昨年七星剣王となった選手でさえ、彼女の間合いに入らないように徹底して戦っていた。

優勝者でさえ、彼女の雷切を防ぐことが難しいのだというなによりの証明。

故に斬り合い（クロスレンジ）を絶対領域とする彼女の間合いは最強なのだと信じていたのだ。

だというのに、真正面から叩き潰されている。

それがなによりも信じられない。

『東堂選手相手に先手を取る。これがどれだけ難しいのかは二・三年生（私達）が誰よりも知っている！ですが倉敷選手はそれを見事に成し遂げました！まだ試合は終わっていませんが、これだけは言わせ

ていただきたい！今年の選抜戦は、大波乱だァ!!!』

（流石だね蔵人）

未だにざわめく観客席で、綾辻絢瀬は静かに座す。

蔵人が一歩先に進んだことに喜ぶ一輝達とは別に、絢瀬は彼が為したことを反芻していた。

（全く同じ動作、そして同じ思考。それを対処しようと刀を振るった会長の動きを見て即座に動きを増やした。唐竹割りと横凪ぎのほぼ同時攻撃…流石の生徒会長でも避け切れなかったか…）

言うのは簡単だが、実行するのは常人には不可能だ。

しかし倉敷蔵人は伝達信号の速度が０．０５秒を割る神速反射（マージナルカウンター）を生まれ持った力を持つ。

蔵人だからこそできる右手一本で放たれる同時斬撃。

それも不意打ちで放たれたものを初見で受け切れる者など、それこそ数えきれるかどうかだ。隣にいる青年はその数少ない例外なのだが。

父だけでなく蔵人とも鍛えてきたこの２年間で彼女の経験値も大きなものになっていた。

刀華が迎撃のためにただ刀を振るっただけではないのはわかる。剣士として成長した蔵人もそれを理解したがために霊装《大蛇丸》で受けずに躱したのだ。

（綾辻一刀流の神髄は受けの技術。如何なる攻撃でも発生する綻びを見極め、生き残ることに特化した流派だ。攻めながら回避される経験はそうそう出来るものじゃない）

絢瀬も同じ流派の人間。

彼が為した行動の難しさは理解している。

「ははっ…やっぱり蔵人はすごいや…！」

そして友人（一輝）も蔵人の技量を即座に理解し、興奮を抑えきれないのか呟いた。

「左上にかけて放たれた斬り上げを確認した蔵人は振り下ろしを瞬時に止めて足さばきを変えた…！多分左足首を軸に逆時計回りに回転

をかけながら身体を傾けて横凪ぎに攻撃を切り替えたのかっ！」
「クラウド先輩も凄いけどそれを瞬時に理解するイッキのほうがアタシは凄いと思うのだけど!?」
「流石の観察眼だね黒鉄君、まさしくその通りだよ。《綾辻一刀流二ノ型　御神楽（みかぐら）》。前進しながら足さばきで攪乱し対処するカウンター。それに合わせた同時斬撃を蔵人は実行したんだ」
元々神速反射（マージナルカウンター）であらゆる攻撃に対処することが出来る蔵人だ。
そこに受けの技術に特化した刀術を学べばどうなるか？
答えは簡単。無駄な動きがなくなり、今まで以上に行動が冴えわたる。無駄を省けば他に費やせる行動が増える。
蔵人はそれに同時斬撃という防御不能技を追加したのだ。
それがもたらした成果は今、目の前で示していた。

（やられた…っ!!）
斬り裂かれた腹部を押さえながら刀華は自分が仕出かした失態を悟る。
全く同じ攻撃、全く同じ思考。それに対して深く考えずに刀を振るったことが失敗だった。
蔵人の発言の意図を汲み取れなかったミスだ。
〝オレは動きを見てから二・三手変えられる〟
まさにその通りの意味だったとは考えが至らなかった。
そこまで考えての発言であったのかは判断できないが、刀華はそれにうまく乗せられたのだ。
（最初の攻撃も初速が早くても単調。これまでの試合もそうだったから、そのような戦い方だと考えてましたが…偽りでしたか…）
彼にとって斬る際の感情なんてものはあってないようなもの。
すべての運動の根底を司る速度の頂点、それが反射速度。
他人よりも3倍優れたその能力があれば、その暴力だけで大半を蹂躙できるのだ。
「気ィ抜いてんじゃねぇよ《雷切》！さっき教えてやっただろうが。俺は二・三手見てから変えられるってよォ…！」

「ええ。見事にしてやられましたよ蔵人くん。真正面から傷をつけられたことなんて、師匠達以外では始めてです」
「ッ！」
右手からパチパチと火花が散る。
訝し気に見る蔵人を他所に、刀華はためらいもなく己の傷口に火花を押し付けた。
「〜〜〜ッッ!!」
肉が焦げる臭いが生まれる。
彼女が右手を離した後の脇腹には先ほど斬られた部分には焦げた部位だけが残った。
『な、なんと東堂選手！斬られた場所を斬られた部位に電撃を当てたことで焼いて塞ぎました！』
『最初の一手で傷をつけたその実力、素直に称賛に値するものだね。だけどこれからはそうはいかないだろうね』
『そうなのですか西京先生？』
『当然。アイツにゃそんな生易しい修行は課されちゃいないよ。今の一撃で脳内で生まれてた慢心は消えただろうね。ここからが本番だよ』
「…ッ…。これは戒めです。倉敷蔵人という剣士に対して、私は心のどこかで下に見ていたことに対する戒め。…ここからが本番です」
「そうこなくっちゃぁなぁ!!」
刀華の発言にニヤリと笑みを浮かべつつ、身体能力をフルに生かして斬りかかる。
全力で振るわれる刃を雷速で返しながら戦いは苛烈になっていく。
ここまでとは考えていなかった。
彼が誇るこの神速反射（マージナルカウンター）は決して映像からではわからない凶悪さを持っている。
いくら刀華の抜刀術が早かろうと、それを放つよりも先に彼は行動を移してくる。
《閃理眼（リバースサイト）》がなければ彼の行動を読み切れずにさらに傷を増やしていただろう。

今でも瞬間的に四連撃が飛んできている。
居合による斬り上げから身を回転させて斬り落とし、そのまま身体を弾丸のように前方へとねじ込ませる。
先ほどまで2連撃で済ませていたところに放たれた完全な不意打ち。
それを自分の身を投げ込ませることで、蔵人が放つ間合いを奪って威力を殺す。
しかし威力が落ちたといえども鋭い刃が刀華の身体を傷つけていた。
「ッッ～～！」
実況の声すらも届かないほどの集中力。
それでも互角に斬り結んでくる相手に、少しずつながらも、刀華は確実に消耗させられていた。
（チッ…）
対する蔵人も内心で舌打ちをする。
連撃数を増やしたことで確実にダメージを負わせている。
彼女の腕や腿に掠めて肉を削ぎ取っているのがその証拠だ。
だが、決定打になっていない。
それが蔵人を内側から蝕んでいた。

◆

「トウドウ先輩すごいわね…クラウド先輩の攻撃をあそこまで受け切るなんて…」
「うん。2年前とは全然レベルが違う。才能だけじゃあそこまでいかない。しっかりと基礎を身体に覚えさせているから東堂先輩の反撃にも無駄なく対応できてるんだ」
「綾辻一刀流の体捌きを父さんと同レベルで習得した蔵人は、学生の領域は超えてる。昨年の七星剣武祭でベスト3の実力である東堂さんであっても今の蔵人は手に余るはずだ。だけど…」
客席から見ている三人はこの試合を観て蔵人が押している認識で

一致していた。
ステラは蔵人の反射から放たれる斬撃をあそこまで斬り合いで対応できる刀華の実力に目を見張り、一輝はここまで高め鍛え上げた結果に感心する。
そんな二人とはすこし違う感想を抱いた絢瀬に二人は意識を向けた。
「正直な話、斬り合いにおいて一輝君みたいな人外以外では蔵人は世界でも有数の実力者だと思ってる」
「さりげなく僕が人外扱いされたんだけど」
「イッキ。それは現実だから受け入れないと」
「えっ」
「だからこそボクも、そして蔵人自身も予想が外れたよ。《雷切》東堂刀華…、彼女も昨年と比べて明らかにレベルが上がっているこのままだと…」
その発言の意味を一輝が気づく前に、試合は動く。

◆

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」
試合を常に優位に進めていた蔵人が突然吠えた。
攻撃の手を止めて霊装《大蛇丸》を眼前へと移動させ、左手で《大蛇丸》の剣先を握りしめる。
完全に受けに回っていた刀華も今を好機と斬りかかることはなく、蔵人が行う謎の行動に対して動くことが出来なかった。
「全くよォ…正直ここまで長引かせられると思っちゃぁいなかった。綾辻一刀流二ノ型《御神楽(みかぐら)》、三ノ型《東遊(あずまあそび)》。こいつらを理想的なタイミングで放って、それを悉く受け流されちゃぁ堪ったもんじゃねぇ」
蔵人は深くその場で息を吐く。
先ほどと違って全く攻めに来る気配がない。
《閃理眼(リバースサイト)》で電気信号を読み取れる刀華も、この瞬間の彼は攻撃し

ないと理解した。
それ故に呼吸を整えて反撃のタイミングを計るべく、回復に努める。
だれが見てもそれは傍から見ればただの愚行。
自らの手を傷つけるその行為に、観客だけでなく、実況解説の西京寧音や試合を観ていた一輝ですらもその意図が分からなかった。
何よりもこのまま攻撃を続けていれば勝つのは《剣士食い》だろうと、ほとんどの観客が思っていたからだ。
「…使うんだね、蔵人」
ただ一人。
常に傍で、彼を見ていた彼女(絢瀬)以外は。
「本当は、黒鉄をぶっ倒すために鍛えてきた力だ。ヤツと相対したその場で使うつもりだった。まさにとっておきってやつだ」
自分を応援する客席。そこに座る存在を一瞥する。
自分をここまで変える原因になった存在であり、越えるべき因縁のライバル。
黒鉄一輝という男を。
「だがここまで攻められても本気の力を見せねぇテメェ相手だ。ここで勝てなきゃヤツに勝つ以前の問題になる。だからこそ…出し惜しみはもうしねぇ」
「なっ…!!」
『!??』
その場にいた関係者全員が驚愕する。
バキッ
そんな音を発てながら、蔵人が握る礼装が折れたのだ。
否、それは違う。
折れたのではない。
伐刀者(ブレイザー)の魂とも言える固有霊装(デバイス)そのものを、蔵人は自らへし折ったのだ!!
「何をしているのですか貴方は!」
刀華はその光景に声を荒げた。

固有霊装（デバイス）とは魂の形。
自分自身の潜在的なものが数多ある武器の形状となって具現化する世界で同一なものは存在しない、唯一無二の武器である。
使用者の心が折れない限り、決して壊れるものではない。
その人間の価値観や美意識、人格や生き方。それらが集まってできた結晶なのだ。
逆に言えば固有霊装（デバイス）が壊れる時とは、使用者自身の心が折れたときとも言っていい。
「〜ッッ!!貴方は…!この戦いを放棄するつもりですかッ!!?」
先ほどまで圧倒的な暴力で斬りかかってきた相手が、突然敗北を認めるような行動を取ったことに、刀華は激高した。
確かに自分が押されていたのは事実。
だがそれでも霊装を壊すほどの愚行を犯されるなど誰が想像できようか。
試合では常に冷静に相手を分析し、切り伏せる。
そんな彼女が戦いの中でここまで感情を表すのは初めてだろう。
「なぁに言ってやがる」
そんな刀華を見て、心外だと蔵人は言葉を零す。
ここで諦める？冗談じゃない。
互いに引けない立場で、引けない状況で、余すことなく全力をぶつけた上で黒鉄一輝（アイツ）という男相手に勝利をつかみ取りたい。
その一心で彼はここまで己を高めてきた。
血尿が出ようと、内臓が潰れようと、決してこれだけは譲らない。
「黒鉄一輝（アイツ）を喰らうのはテメェじゃねぇ、この俺だ。だからこそ、この場でテメェを喰らいつくす！」
「ッ!!」
へし折った霊装から光が溢れる。
握りしめたことで手に刃が埋まり、血が出ようとも意にも留めない。
『な、なんということでしょう!?自らへし折った礼装《大蛇丸》が、倉敷選手の手の中で光を放っています!!』

『…ッ！おいおい…まさか…』
試合会場全てを包みこむほどの光量に、目を瞑ってしまう者もいるほどだ。
「クラウド先輩…一体なにを…？」
「蔵人から目を離さないであげて。黒鉄君」
「綾辻さん？」
「これから起こる全てが、蔵人の想いそのものだよ」

礼装から光が溢れ、そして一気に集約される。
集う場所は剣士の両手。
天を突かんばかりの輝きが、新たな力へと昇華する！
会場を包んでいた光が収まった時、この場にいた全観客が彼が起こした事の重大さを理解した。
『な、ななななんということでしょうッ！先ほど自分自身で破壊した固有霊装（デバイス）が確かに存在します！それも二本!!幻覚ではありません！皆さんの目がおかしくなったわけではありませんッ!!確かに倉敷選手の両手に、霊装が握られていますッッ!!』
逸脱した状況からいち早く意識を取り戻した解説の月夜見（つきよみ）の声を聞きながら、刀華も理解しきれていない。
かつてはノコギリ刃がついた鉈のような形状をしていた礼装。
それが今握られているものは両方とも両側に刃がついたものに変わっている。
――霊装そのものが変わっているのだ。
常識ではありえない。
先も述べた通り、自分自身の魂の形が霊装として現れる。
変化しようがなく、させようがない。
だが眼前の男はそれを成した。
今わかるのはそれだけだ。
黒鉄一輝という剣士を打ち倒すべく、今までの自分自身を死に追いやるほどの強い意志と想像を絶する鍛錬を積んだのだ。
そしてその人生そのものが、これから己を打ち倒さんと襲い掛かっ

てくるのだと。
「準備はいいか？」
かけられた声で刀華の意識が戦場へ戻る。
蔵人が浮かべる獰猛な笑みは変わらずだが、新たな力を刀華（獲物）に向けていた。
刀華はその意図を察し、小さく笑った。
両者共に互いの予想を大きく上回る実力を備えていた剣士。
これからのことなど考えない。
自分の全力をぶつけるために、刀を鞘に納めて構える。
出し惜しみなど愚の骨頂。
二つ名を冠するにあたった破軍学園における最強の技。

「…《雷切》東堂刀華」
「！…綾辻二刀流　倉敷蔵人」
「「押して参る」」
互いの想いが交差する――。

十二刀―《雷切》ＶＳ《剣士殺し》３

先ほどまでは熱狂的な歓声とそれ相応人々の熱気で満ちていた試合会場。

それが今では抑え込まれたかのように鳴りを潜め、観客全員が剣士達の一挙手一投足を見逃すまいと集中していた。

電光石火と評するのも足りない。

全力で操る剣戟はまさに神速と呼ぶにふさわしい剣速。

《閃理眼（リバースサイト）》の《伐刀絶技（ノウブルアーツ）》を有する学園が誇る最強の生徒会長　東堂刀華。

相対するは文字通りの神速の反射。

０．０５秒の反応速度という伐刀者（ブレイザー）の能力とは別の特異体質を持つ男。

両手に持つ得物を駆使して神速を叩き落す綾辻流の免許皆伝　倉敷蔵人。

時間にすれば数秒の空間であるかもしれないが、その間に１０はくだらないぶつかり合いが発生している。

これが大会の決勝戦と言われても納得してしまうほどに、固有霊装に込められて放たれる。

打ち勝つ執念が。

鼓舞する熱気が。

斬りあえる歓喜が。

解説など不要。

齧った程度の技術を持った者達であっても、その戦いでどれほど想いが込められているのか心で理解できた。

呼吸すらも忘れてしまうほどに周囲の観客達を飲み込んだその空間は、刀華（剣）と蔵人（客達）が生み出す一挙手一投足が、一つの映画のメインを張れるほどに綺麗なものであったのである。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

「ハァァァァァぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」

斬撃の雨あられ。
ここに野菜でも投げ込めば瞬きの間もなく野菜くずに早変わりだ。

両者互角。
観客達の眼からはそう見えることだろう。
攻め、守り、受け流す。それが出来ているからこそ拮抗状態が成り立っているのだ。
「す、すごい…」
それを観戦するステラは感嘆の声をあげた。
学園最強と己が知る最強の友人。
何度も抱いたはずの感想がこの短時間の間に何度も更新されていく。
ステラ・ヴァーミリオンは伐刀者（ブレイザー）ランクがAに冠される圧倒的実力者だ。
この学園に来たのも己を高めるためである彼女は生粋の武人。
『無冠の武王』と称される黒鉄一輝から見てもその才能は世界トップと言い切れるほどの彼女は剣戟が巻き起こる舞台から目を離すことが出来ない。
魔力制御も技術もすでに一流だが、二人の伐刀者（ブレイザー）が有する剣技は一流ではない。超一流。
自分の持つ技量ではまだその領域には至れないとわかってしまうほど、人生（全て）を剣に捧げたことがわかる一撃が彼女の心を高揚させる。
「ねぇイッキ、アタシ…もう何度目かわからないけど、この学園に来てよかったって心から思うわ」
「ステラ…そうだね。僕も同じことを思ってるよ」
魅入るステラに一輝も笑みを浮かべて返す。
事実、一輝もこの学園に来た事で得ることが出来たモノが沢山あるのだ。
妨害は多少あったものの、その程度は苦でも何でもない。
それを遥かに上回る出会いが、彼の人生を鮮やかに彩っている事は紛れもない事実なのである。

「この戦いを、この出会いを、僕は忘れない」
二人はそれ以上語ることはしなかった。
どんな結果であろうとも、試合を見届ける。
これが二人に対する誠意であると思ったからだ。

（――――ッ）
数えきれない剣戟を交えてきた。
それによって周囲がこの戦いを熱が篭った目で見ているのだが、その反応とは裏腹に、神速の剣閃を生み出している東堂刀華は悪態をつきそうになる。
己が有する伐刀絶技（ノウブルアーツ）、その二つは戦闘において絶大な力を発揮する。
脳の電気信号を読むことで行動を先読みする《閃理眼（リバースサイト）》。
納刀することで鞘に電磁力を発生させることで反発を利用して放つ電磁抜刀術である《雷切》。
特に《雷切》は一度（ひとたび）放てばどんな相手でも必ず勝利を収めてきた非常に強力なものであり、東堂刀華を学園最強に仕立て上げて『雷切』の異名を世に知らしめた彼女が誇る最強の技だ。
七星剣武祭で彼女は優勝に手が届く距離にいた。
結果は頂に届かなかったものの、その敗因は《雷切》を出させないように終始徹底した対戦相手が一枚上手であったからだ。
それを証明するように当時の大会結果にて《雷切》を放った試合は全て一撃で決着。彼女を勝利へ導いている。
ではなぜ彼女はこの試合で《雷切》を使用しないのか？
答えは単純明快。使えないのである。
それだけでは語弊を生んでしまうが、詳しく言えば蔵人が終始使わせない様に動いている、と言ったほうがわかりやすいか。
《雷切》は電磁力を利用した抜刀を行う関係上、鞘に納めなければならないのは当然の帰結だ。そんな事彼女だって骨の髄までわかっている。

だが最初から《雷切》を構えていればどうなるか？
答えは簡単。相手から近づいてこない。
そうなれば間合いを詰めるための手段も限定され、遠距離で狙われたりカウンターを狙ってきたりとやりようが出てくる。
刀華はそれの対策として《閃理眼（リバースサイト）》を活用することで、斬り合いの最中に《雷切》を使用する技術を得た。
相手の電気信号さえ読んでしまえば、どんな考えをしていたとしてもこちらが抜刀する方が早い。そして《雷切》は放てば相手を一撃で仕留める威力を有する。
だからこそ《雷切》はクロスレンジで絶対的な強さを持っているのだ。
（《雷切》を放つ隙が――ないっ!!）
だがここで例外が現れる。
脳内の電気信号を呼んで先読みしようにも、相手は自分の反射速度よりも早く行動出来る《神速反射（マージナルカウンター）》を持つ男。
《閃理眼（リバースサイト）》を全力で使って漸く互角に戦える存在だ。
そんな彼が刀華が刀を鞘に納める動作を易々と見逃すはずがない。
（冗談じゃない！）
さらに今の彼は二刀流。
一本でも信じられない程の手数の多さであったというのに、それが二本だ。
常人離れした反射速度と二刀流の組み合わせは、手数が二倍どころの話ではなかった。
距離を離すべく大きめの技を放っても、綾辻流の体捌きで一切距離を取らせない。
下手に接近戦を仕掛けてしまえば真正面から食い破られる。
本来クロスレンジは一度も破られたことがない《雷切》の領域。
敵に攻め入られたとしても即座に斬り伏せられる最強の距離が、神速反射（突然変異種）によって殺されているのだ。
（確かに危険。確かに分が悪い――）
己の師であっても、接近戦でここまで徹底して彼女の初動を潰すこ

とはできないだろう。
不意を突いて距離を離したり、伐刀絶技(ノウブルアーツ)で刀華を倒すなどは星の数程経験しているが、真正面から上回ってくることなどなかった。
(そんなことでこの戦勝負いを投げ出せると思っているの!?)
刀華にも優秀な師たちがいる。
彼らからも多くの技術を叩き込まれた。
こんな状態でも距離を離すことで、仕切り直しを行う技も持っている。
しかし。
しかしだ。
(私は学園最強(この座)を守りたいんじゃない!)
それを行うということは、刀華自ら己の最強(誇り)を捨てることに他ならない。
これまで築き上げてきた絶対的な信頼。この領域でなら間違いなく最強である《生き様(雷切)》に自ら泥を塗る行為は断じてできない。
(私は…この誇り高い騎士に勝って、武の頂(七星剣王)になりにいくんだッッ!!)
ただ勝つだけがこの戦いではない。
己こそがクロスレンジにて最強であると、そう証明するのがこの戦いだ。
互いに剣に生きてきた経験(人生)がある。
数多の選択肢から選び研鑽を重ねてきたこの得意分野だからこそ、自分から負けを認めることなど出来やしない!!
(受けて立ちます!
この不敗(さいきょう)で、勝つのは私だ!!)
クロスレンジ間で己から距離を離すことは相手が自分よりも上手であると認める証拠だ。
故に刀華は歯を食いしばる。
負けられない。必ず勝つ。
雷切こそが、己の領域こそが最強であると頂に示すために――!!

◇

（チッ、ここまで凌ぎ切られるたァ想定以上だ）

対する『剣士殺し』の所以たる反射速度を持つ蔵人も刀華と同じく内心で悪態が出てくる。

固有霊装（デバイス）を変化させる奥の手。綾辻流で培ってきた技術。そして神速反射（マージナルカウンター）。

これらを駆使してもまだ倒せない。

それだけ刀華が鍛えぬいてきている証拠であり、彼女の強さは手放しで褒めれるものだった。

《神速反射（マージナルカウンター）》。

それは倉敷蔵人を『剣士殺し』として語らせた才能。

圧倒的な反射速度があれば全てを蹂躙する事が出来る。

どれだけ身体を鍛え、型を磨き、駆け引きを覚えていたとしても、行動全ての初速で置き去りにされてしまえば無意味と化す。

己よりもどれだけ優れていようとも、不意打ちであったとしても、蔵人は見てから全て対処が出来るのだ。

その後出しジャンケンのような理不尽さが『剣士殺し（ソードイーター）』たる真価。

技も経験も策略も駆け引きすらも無意味に変えてしまうその天性の才は、数多の剣士達の希望を潰してきた。

破ったのは黒鉄一輝ただ一人。

それですらも見えない位置に備えていた下準備があってこそ得れた勝利だった。

それは一輝ですら真正面から蔵人の《神速反射（マージナルカウンター）》を破る手立てがなかったことに他ならない。

（ジリ貧になると判断したから〝奥の手〟も切ったってのに、それでも粘られるとはな…）

『技』でもないただの『特性』。

片手があれば同時に斬撃を放てる蔵人の両手には、異なった形状の二振りの剣。

並どころか上辺の伐刀者（ブレイザー）であっても彼と互角に打ち合うことすら出来ないというのに、学園最強はそれにすらもついてくる。

（まだ余裕はある。だが持久戦に持ってこられちゃこっちが負ける）

追随を許さない特性（ギフト）を得ている蔵人は、己の弱点も把握していた。

それはスタミナである。

相手の初動に対して常に上を取れる反射速度は相手よりも行動回数が圧倒的に増えることになる。

本来ならその増えた行動回数で蹂躙できるのだが、逆にいえばその行動回数だけスタミナ消費が激しくなることに他ならない。

得意分野で拮抗する両者であるが、刀華がその弱点を看破して持久力勝負に持ち込まれれば彼としても面倒であった。

目で終えても身体が動けなければ反射速度は無意味なのだ。

修行では基礎体力重視で鍛えてきているものの、スタミナ消費そのものを無くすことは不可能だ。蔵人も人である以上、必ず限界がやってくる。

（学園最強（あいつ）のスタミナがこっちより低い事を狙ってもいいが、それはリスクに見合ってねぇ。先にこっちがバテちまえばそれで終わりだ）

だが距離を取って一呼吸を取ろうにも、刀華の《雷切》がその選択肢を許さない。

一輝が留年になることがわかってから参加しなかった選抜戦。その中でも『雷切』の試合は見逃すことは一度もなかった。

黒鉄一輝（宿敵）と公式試合で戦えるまで決して負けない。

それを第一に極め続けた学生生活。

勝つために頭を下げて教えを請うたこの綾辻一刀流（技術）。

それらが花開くのがこの選抜戦なのだ。

（いつまで相手を嘗めてかかっている倉敷蔵人…ッ!!）

黒鉄一輝は一度見た剣技を観察すれば弱点を克服した剣技として模倣する《模倣剣技（ブレイドスティール）》を持っている。

《一刀修羅》や《禁術　八門遁甲の陣》のインパクトに隠されがちであるが、『無冠の武王』と称されるに至った根底は相手の思考や価値観、そしてその技術を即座に分析解析を行って己の糧に出来る異常な

ほどの観察眼だ。
いつかは相まみえることになる相手に、一度でも使用した剣技が通用しなくなるのは非常に厄介。だからこそ蔵人は無意識の中で技を抑えながら戦っていた。
それは伐刀者（ブレイザー）ではなく、一人の剣士として許せるものなのか？
己が目指す黒鉄（武）一輝（の頂）は、隠していたモノを引っ張ってきただけで勝てる程単純なのか？
（ちげぇだろ…それが全てじゃねぇだろうがッッ!!）
〝奥の手〟を切った？
それが何だというのだ。
相手は３０秒もあれば即座に弱点を見抜いて改良を加えてくる男だぞ！
隠している奥義であったとしても、それが試合を左右する一手になるとは思えないし、そんなイメージすらも湧くことはない。
であればどうすればよいのか？
決まってる。
極めて、極め抜いて、模倣改良では追いつけない極地へ至る。
（既存が通じないなら新規で対抗しろ！今が駄目なら一秒先（未来）までに成長しろ!!）
それは奇しくもかつての一輝が導き出した軌跡。
視覚も味覚も嗅覚も触覚も痛覚も、今はその全てが全部いらない。
瞬きの間に重ね合わさる刃の衝突に、そんなものは全ていらない。
それらに用いる力を、切り詰めたその力達を、この一瞬に集中しろ!!
――挑め。
――挑め！
――挑め!!!
――やってやろうじゃねぇかぁぁあ!!!」

◇

「っ〜!!」
「らぁぁぁあッッ!!!」
両者互角の拮抗勝負。
だがその戦いにも変化が生まれる。
『剣士殺し(ソードイーター)』倉敷蔵人が雄叫びを上げ、数段迫力を増して刀華へと斬りかかったのである。
『おおっとぉ!!倉敷選手が果敢に仕掛けたぁ!!ただでさえ異常な速度であったというのに、彼はまだ上があるというのかぁ!!』
試合に魅入ってしまっていた実況も我に返って再開する。
蔵人が仕掛けたことで試合の勝敗を決める瞬間が近づいてきたことがわかったからだ。
烈火の如き苛烈な攻め。
先ほどまでこちらを封殺するように動いていたというのに、突然蔵人は刀華を一気に倒し切る方針に切り替えた。
それが示す答えは――蔵人(彼)のスタミナが切れ始めているということ。
(圧倒的手数と反射速度…なるほど。私が想定している以上に、彼の反射行動は消耗が激しいということですか――!)
刀華も剣戟を受け流しつつ、その答えに至る。
このまま持久戦に持ち込めばこちらの勝利は確実だと。
だがそれはあり得ない幕引きだ。
東堂刀華は、目の前の剣士を相手にして、打ち勝つと決めていた。
「――〝稲妻〟」
《雷切》はまだ放てるほど隙が生まれていない。
なので多少強引な方法であるが、刀華は周囲に電磁力を発生させた。
蔵人はピリッと肌に刺激が奔るのを感じ取った。
だがそれは自分に対してデメリットがあるわけではないと蔵人は

意に介さず、攻める構えだ。
「――〝疾風迅雷〟！」
刀華は更に雷を身に纏う。
しかしこれは帯電を狙うものではない。
現に打ち合う蔵人にはなんの影響も出ていなかった。
しかしその効果は目に見えてわかる。
蔵人の猛攻で防戦になっていたにも関わらず、刀華が二つ技を使用したことで再び拮抗するほどの速度になっていたのである。
「――ハッ！まだ上があるってか！」
「私は、勝つ!!」
蔵人の問いに刀華は心境を吐露しながら、一気呵成に攻め立てる。
雷を身に纏った今の状態は電気信号を既存よりも早めて己の速度を上昇させる。
それに重ねるように用いた〝稲妻〟は電磁力から発生される引力と斥力を利用する事で通常攻撃よりも速度を上乗せするものだ。
身体に強化を施して用いる刃の軌跡は増えていく。
まるで雨音のような音の感覚で鳴り響く剣戟は、互いの攻撃の激しさをこれでもかと伝えてくる。
（まだ…押し切れない――!?）
だがそれは刀華にとっても諸刃の策だ。
〝稲妻〟と〝疾風迅雷〟の重ね掛け。バフにバフが乗る乗算方式の使用方法は非常に強力。
しかしその速度が生み出す反動が手首にのしかかってくるのだ。
長く使用すればするほどに刀華は刀を繊細に扱うことが困難になる。
それは蔵人を相手取るには危険領域（デッドゾーン）。
（まるで――悪い夢を見ているようですね…）
学園最強と冠され、事実前回の七星剣武祭でも優秀な結果を残している刀華は思う。
絶対的な自信をもつ自分の土俵（クロスレンジ）で、何一つさせてもらえない。
互いに無傷ではない。

だが軽くない傷を負ったのは最初に刀華が斬られた一撃だけだ。
いくら自身の速度を上げた所で、《神速反射（マージナルカウンター）》の初速を越えれるわけではない。
隙を作り出そうと切った手札で漸く同じライン。その事実が重くのしかかる。
（強い――あまりにも！）
スタミナ切れを待つ気は早々なかったが、その手を選んでいても上から策ごと叩き切られていただろう。
――〝雷鷗（らいおう）〟!!
己の手首が悲鳴を上げ始める中、その行動を刀華自身思考していたのだろうか。
己の固有霊装（デバイス）から雷を飛ばす。
すでに牽制にも成りはしないシンプルな技。だがコンマ一秒でも意識をずらせればよかった。
蔵人が剣の腹を使って雷を受け流すよりも早く、刀華は全身を脱力させることで地面へ向かって崩れ落ちるように身体を倒れ込ませた。
命の取り合いをしている中で力むことを放棄することは困難だ。
だがそれを刀華は躊躇いもなく選択した。
蔵人の視点でその光景を見れば、眼前の刀華が消えたように感じただろう。現に反射による行動がほんの僅かであるが遅れていた。
頭が地面へ落下する――直前で全身に力を巡らせて、刀華は蔵人の懐へと一気に飛び込んだ。
「させるかよッッ！」
「――――ッ!!」
自分の速度さえあれば、納刀するのに一秒も必要なかった。
必要だったのはそれを行うための状況を作り出すこと。
『剣士殺し（ソードイーター）』が何をしてきてももう遅い。
攻撃を振ってきても、両腕さえ動けば放てる。
長いようで短い時間の中で、刀華は自らを投げうってついにその状況を作り出した。

「――《雷切》ッッ!!」

音すらも追いつけない鋼の稲妻。
その衝撃から大気が吹き飛ばされる。
千里に轟く轟音と閃光が生み出され――――ー
「ッ――――…」
「…っぶねぇ」
そのうえで蔵人は両足で立っていた。
チッチッチッと鳴る音を聞きながら蔵人は刀華の攻撃を受けきっていた。
東堂刀華が『雷切』として名を轟かせてから一度も見たことがない光景。
彼女の代名詞たる《雷切》が受けられ、防がれたのだ。
放てば不敗。
目では捉えきれない程の速度から放たれる電磁抜刀。
だがその技は相手の防御ごと打ち破るものではない。
相手が反応をする前に、対象を斬り伏せる技だ。
刀身が彼女の電撃で光り輝くプラズマと化していたとしても、技の本質は防御をさせない攻撃速度にある。
であれば防げる。
スタートダッシュでは誰にも負けることがない蔵人が、防御に全ての意識と力を向けたからこそできる偉業。
『……』
実況だけではない。
観客達もその光景に言葉を失う。
これほどなのか。ここまでなのかと。
力を使い果たしたのか、刀華の身体が倒れ込む――
「終わりだ」
――――否。
蔵人の言葉と共に、刀華の右足が、勢いよく地面を踏みしめた。
表情は見えない。

だがその身に抱える想いは蔵人にも伝わった。
――絶対に勝つ！
蔵人の耳は刀華が《雷切》を放つ前から聞こえていた音。
気にも留めていなかったその音が、一向に鳴りやんでいないことにここで気づく。
それが示すこと。
学園最強（彼女）は、まだ勝負を諦めていないということ。
先に使用した〝稲妻〟、〝疾風迅雷〟も解かれていないのがその証拠。
「テメ……！」
追いつめられた蔵人が笑みを浮かべつつ冷や汗を垂らす。
しかし何をしようとも、今度こそ彼女を止められない。
『最強』の名を持つ《雷切》を防げばこちらの勝機は無い。
そう思い込ませればよかったのだ。
ベストタイミングで放っても、倉敷蔵人という男の執念が、《雷切》に対処してくる可能性。
本来ならば悪夢になるソレを刀華は信じた。
だからこそ放てる。
刀華と蔵人の距離は頭二つ程度の短い距離だ。
この間合いでなら間合いがつぶされた刀は不要。
事前に作っていた電磁界が、刀華と蔵人の間にトンネル状に形成され直されていた。
それが刀華を勝利へ導く道となる――!!
「《建御雷神（タケミカヅチ）》――」
トンネルに身を投じたその瞬間、刀華の肉体が破壊的な速度で加速する。
彼女にとっての最後の切り札。
それが自身の肉体そのものを弾丸として放つ電磁加速砲（レールガン）。
その瞬間溢れんばかりの光量と爆音が、会場内を包み込むのであっ

た。